
私ハ貴方ヲ愛シテル

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私ハ貴方ヲ愛シテル

【Nコード】

N1030P

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人から優しくされたことのない女子高生 由佳。

その由佳に優しくしてしまったがために誤解されてしまった高校生 彰人。

誤解を何とかと努力するが、由佳には話しなんか通じない。

そして、由佳の毒牙は彰人だけでは納まらず、彰人の彼女 葉月にまで及んでしまう。

そして、由佳は本当に壊レテしまった。

プロローグ

貴方ヲ初メテ見タ時カラ
私ハ貴方ニ夢中ダ。

貴方モ私ニ夢中ダヨネ・・・？

貴方ノ目ニハ私シカ映ラナイヨネ・・・？

其ノハズナノニ・・・

隣ニ居ルノハ・・・誰？

貴方ノ隣ニ居ル女ハ・・・誰？

其ノ雌豚ハ・・・何！？

貴方ノ隣ニ居テ良イノハ私ダケナノヨ・・・ッ！

ア、分カツタ・・・

貴方ハ其ノ女ニ纏ワリ付カレテ居ルノネ・・・

迷惑シテイルノネ・・・

ウフフ・・・貴方ハ優シスギルノヨ・・・

安心シテネ・・・

今、タスケテアゲルカラ・・・。

由佳視点 アノ人

…人間は、嫌いだ…。

ザワザワと五月蠅く、誰が誰を好きとか、誰と付き合ってるとか…
くだらない話ばかりをしている…。

私はそんな低俗なものに興味はない…。

私は…愛なんて知らない。

知りたくもない…。

人は信用すると裏切ったり、傷つけたりする。

人は生き物の中で最も低俗な生き物だ。

絶滅すべき生き物は人間だろ。

なのに、無駄に生き延び繁栄している。

本当にくだらない世の中だ。

消えてしまえばいいのに…。

そう思っていた…。

でも 今は世界があって良かったと思っている。

あの人に会えたから…。

あの人に会わせてくれてありがとう…。

神様…

あの人との出会いはまさに運命だった。教科書を忘れた私に優しく

「あ、教科書貸そうか？」

と言ってくれた。断ると、

「あー ごめん。言い方変える。

俺の教科書貸す代わりに、数学の教科書貸してくれない？」

忘れちゃってさ。と少しイタズラっぽく笑う彼。

ふふ…嘘が下手ね。

さっき数学の教科書持ってたじゃない。

私に教科書を貸させるために嘘を付いたのね。

優しいのね。

私は彼に数学の教科書を貸した。

そして、彼の教科書を借りた…。

彼の教科書には名前が書いてあった。

彰人視点 アノ娘

俺は割と人間が好きだ…。

人間は…とても可愛い生き物だと思う。

好きな人と付き合いたいけど、恥ずかしがったり照れたりして、告白する事ができない。

そんな人が、すごく可愛いと思う。

…ま、悪い人もいるけどね…。

俺も好きな人がいて、恥ずかしがったりしたけれど、去年…告白した…。

答えはOKだった。

向こうも…俺の事がずっと好きだった…と言ってくれた。

そのとき思ったのは「やったー」より、「もっと早く告白してればよかった」だった。

人間のその欲張りなところも、可愛い…と思っておこう。

後悔先に立たず…てね。

昔の失敗なんて考えない考えない。

ふふ…なんか幸せだなあ。

神様…ありがとさん♪

彼女のことは前から気になっていた。好きって意味じゃなくて、いつも1人でいるし、しゃべってるの聞いたことないから。

だから、教科書を忘れても借りる人がいないんじゃないかなあって思っ…

「あ、教科書貸そうか？」

断られたけど、

「あー ごめん。言い方変える。」

俺の教科書貸す代わりに、数学の教科書貸してくれない？」
忘れちゃってさ。と明るめに言ってみた。

すると、彼女は俺の教科書を受け取って数学の教科書を貸してくれた。
た。

ホントは数学の教科書は持っていたけど、こう言わなきゃ彼女が教科書を借りてくれないと思ったから…。

教科書忘れたのは本当のことだし、嘘は付いてない…。

とりあえず 教科書を受け取ってくれて良かった。

そうだ、彼女の名前…。

知らね…。

あ、教科書に名前が書いてある。

由佳視点 アキト

彼の名前は彰人と書いて、アキトと読むらしい。

その次の授業では、教科書を見るたびに笑ってしまいそうで…授業に集中できなかった。

まあ、授業なんか聞かなくても大体分かるんだけどね。

次の休み時間…。

彼が私の教科書を返しに来た。

「助かったよ、ありがとう。…さん」

教室のザワザワで最後のところがよく聞こえなかったけど、たしかに私の名前を呼んでいた。名字だったけど…。だから…

「…由佳でいいよ。名字でさん付けはやめて？」

彼は笑顔で

「うん、分かった。由佳ちゃん。」

クラクラし過ぎて倒れてしまいそう…。

彼は自分の名前を告げ、

「俺のことも、彰人って呼んでね。」

彰人君…か…。

いい人だな。人にもこんないい人がいたんだ。

…なんだろ。不思議な感じがするなあ…。

「分かったわ。彰人君。」

私は…多分笑っていた…。

人に笑顔を向けたのって…何年ぶりだろう…。

私って…笑えるんだあ…。

フフ…私を笑わせるなんて…すごい人だ…。

「ーねえ、由佳ちゃん。」

彼が私の名前を呼ぶ。

「なあに？」

「これって何でこうなるか分かる？」

話しかけてきた内容は数学の事だった。

前の授業で分からない事があったらしく、私に聞いてきた。

それはこの間やったときの内容だったので私は普通に答えた。

彼は納得したらしく、「あー！なるほど！」と言っていた。

ふふ…かわいい…。

「由佳ちゃんって人に教えるの上手だね。分かりやすくてすぐ分かるよ。先生とか向いてるかもね。」

そんなことを言われたのは初めてだった。

私が…先生…？

人嫌いの私が…？

………。

「先生なら…彰人君の方が向いてるんじゃない？」

彼はすごくビクリした様子で「お、俺!？」と言っていた。
そして、こう言葉を続けていた。

「俺は・・・夢があるから、先生はムリだなあ」

「夢？」ときくと「うん」というだけでそれ以上は何も言わなかった。

多分、言ってくれないんだろう。

彼の夢・・・何なんだろう・・・。

でも 訊かない・・・。

彼が・・・言ってくれるまで・・・。

彰人視点 ユカ

彼女の名前は由佳と書いて、ユカと読むらしい。

その次の授業では、彼女が少し笑ってくれたことを教科書を見るたびに思い出して、笑ってしまいそうでした。授業に集中できなかった。授業を聞かないとテストがヤバくなってしまおう（汗）

次の休み時間…。

俺は彼女に教科書を返しに来た。

「助かったよ、ありがとう。…さん」

さっそく、教科書で見た名前を呼んでみる。なれなれしくないように名字で。でも、教室のザワザワで最後のところがよく聞こえなかったとおもうけど…ね（汗）

「…由佳でいいよ。名字でさん付けはやめて？」

彼女に俺の声はちゃんと聞こえたらしい。

俺はそれが嬉しくて笑顔で

「うん、分かった。由佳ちゃん。」

俺は自分の名前を告げ

「俺のことも、彰人って呼んでね。」
と言った。

「分かったわ。彰人君。」

彼女はそう言ってくれた。

心なしか笑っていたような気がする。
それもまた、うれしい。

「ーねえ、由佳ちゃん。」

俺は彼女の名前を呼ぶ。

「なあに？」

「これって何でこうなるか分かる？」

話しかけた内容は数学の事。

前の授業で分からない事があったから、由佳ちゃんに聞いてみた。
それはこの間やったときの内容だったらしく、由佳ちゃんは普通に
答えてくれた。

俺は納得して、「あー！なるほど！」と言った。

言ってからちよつと恥ずかしくなった。だから話をそらそうとして
「由佳ちゃんって人に教えるの上手だね。分かりやすくてすぐ分かるよ。
先生とか向いてるかもね。」

由佳ちゃんは、ビックリって顔をしていた。

少し人嫌いな感じがするけど、根はやさしそうだし教えるの上手いし、
本気で先生に向いてると思ったんだ。

「先生なら・・・彰人君の方が向いてるんじゃない？」

今度は俺がビクリした。そして「お、俺!？」と言った。
そして、俺はこう言葉を続けた。

「俺は・・・夢があるから、先生はムリだなあ」

「夢？」と聞かれ「うん」というだけでそれ以上は何も言わなかった。

彼女も無理矢理聞こうとはしなかった。だから、俺もそれ以上は言わない。

絶対にいえない。誰にも言わない。いや、言えない。

アイツにでさえも・・・。

でも、アイツにはいつか言いたいなあ・・・。

由佳視点 アキト君

その後、彼は移動教室のことを思い出して、急いで教室へと帰っていった。

忙しないなあと思いながらも、かわいいと思ってしまった。

少しにやけていると、私の近くに人が寄って来たのが分かった。

なんだろう。と見てみると、2人の女生徒だった。

女生徒はモジモジしながら、私にしゃべりかけてきた。

「あ・・・あの・・・。」

「何？」と聞くと、やっぱりやめる？とか2人で相談し始めた。

少しうんざりしながら2人の声を待っていると、2人はやっと話し始めた。

「・・・よかったら、私達にも数学・・・教えてくれませんか・・・？」

「・・・え？」

いきなりなんだろう。と思った。

今までクラスメイトが・・・人が話しかけてくるなんて初めてのことであった。

だから、顔には出さなかったがかなり混乱してしまった。

彼女たちは、私が黙り込んでしまったからかなり慌てていた。

「あっ あの・・・彰人君に教えてたから・・・説明がうまいって話をしているのが聴こえたから・・・あの・・・よければ・・・教

えてくれない・・・？」

「ええ・・・いいわよ。」

断る理由もなかった。

彰人君のこともあったから、気分もよかったしね。

彼女たちが聞いてきた内容は、彰人君が聞いてきた内容と一緒に。

だから、彰人君のときと同じように説明した。

彼女たちの反応も彰人君と似たものがあった。

「あゝ・・・なるほど！！！難しかった内容が理解できるようになったよッ！ありがとう！！！」

人に理解してもらえるというのは、なかなか嬉しいものがある。

ま、先生に向いてるとまでは思わないけれどね・・・。

「あのさ・・・授業の内容とかこれからも色々聞いたりしていい・・・？」

どうしよう。とも思ったけど、こんな風に人に頼られるのもいいかなと思ってまた、「いいよ」と言った。

「やったー」という彼女達に少し、笑顔がこぼれた。

・・・彰人君にあってから、まだ二時間位しか会ってないのに、私の価値観も人生も全て変わった感じがする。いつもならこんな感じで話しかけられたら、返事さえしないだろう。

なのに、今日の私は笑顔で返事をしている。

・・・彰人君はスゴイ・・・。

その内チャイムが鳴って、彼女達は席へと帰っていった。

「お昼、いっしょに食べよう♪」と言に残して・・・。

私の予定は無視か。と思ったけど、今の私ならそれでも笑うことが出来た。

彰人君パワーだ♪

彰人視点 ユカチャン

そのあと、俺は移動教室のことを思い出して、急いで教室に帰った。そのときに、由佳ちゃんに話しかけようとしている女子生徒が見えた。

彼女に友達ができるかもしれないな。と少し母親視点でみて、よかった。と思いながら教室を後にした。

次の授業は、大変だった。

先生が風邪で休みになったらしく、自習ということになったのだ。1回先生が来ていたが、適当に説明をしてさっさと出て行ってしまった。

だから、皆しゃべったり携帯をいじっている人が多かった。

そして、俺も友達と喋っていると、

「彰人！俺というものがあんなら！！隣のクラスの女にモーションかけているそうじゃないか！！まったく・・・お前って奴は！！」

変な昼ドラ的展開にされた。（汗）

「モーション（笑）」「なんだとっ！？彰人ー！！」「浮気はいかんぞー！！」

みんなも笑って、俺を助けようとはしない。この展開メンドクせー（笑）

「別にモーションなんかかけてないぜー？」

普通に応えると

「嘘をつくなー！隣のクラスの奴が話してたぞー！彰人がナンパしてたって！！」

「うそだー（笑）」

「ホントだー！！！！」

なんだこの迫力は（笑）

とりあえず、ナンパで思い当たるのといえ、由佳ちゃんだ。
別にナンパした覚えはないんだけど・・・傍から見たらそう見える
のかな・・・。
まいったな・・・。

「普通にしゃべってたただだよ。」

「嘘だー！！！」

「ホントだって（笑）」

「ま、彰人は浮気とかナンパするタイプじゃないだろ（笑）」

「そうそう。」

ニヤニヤと見ていた奴らがやっと助け舟を出してくれた。
出すの遅いけどな・・・。

「全くもう！！あんま誤解を招く行動すんなよ！！」

「はい。」

なんか腑に落ちないけど、面倒なので一応返事をする（笑）

「なんかあったら即座に『葉月』ちゃんに報告するからな!!」

「なんで葉月に言うんだよ（笑）」

「彰人が浮気してるよー! って。」

「しないしない! 彰人は葉月ちゃん一筋だもんな（笑）」

「お前らまで・・・（笑）」

『葉月』というのは、俺の彼女。

中学のときの同級生で、今は他の学校に通っている。

中学の卒業式のときに告白してから付き合っているから、付き合い始めてまだ一年も経っていない。

なので、所謂ラブ状態である。

そして、こいつらの葉月のことは言っている。

彼女や好きな人の話をしているときに、運悪く葉月からメールが来てしまいバレてしまった。

別に隠していたわけではないが、なんとなく黙っていた。

ま、バレても別に隠すもんじゃないしな。

葉月かわいいし（笑）

「ま、あんなかわいい娘が居ながら浮気なんかしたら、俺ら独身ズが許さない（笑）」

「浮気しないし（笑）」

「まあ・・・詳しい話は昼休みにしようか・・・（笑）」

「この話続くのかよ!？」

「当たり前（笑）まだ、ナンパの件を詳しくきいてない（笑）」

「次は昼休みだからな、じっくり聞こうかあ」（笑）」

キーンコーンカーンコーン・・・。

・・・マジかよ・・・（汗）」

由佳視点 オヒル

「・・・さっ、お昼食べましょ♪」

さっきの彼女達は言った通りに、お昼休みになったら私のそばへと寄って来た。

いつもは、1人で食べていた食事。1人で使っていた机。そこに2人が寄ってくる。

2人は手際良く近くの机を引きずって、私の机にぴたっと付けた。人と机を付けるなんて、小学校以来かもしれない。

「わっ！由佳ちゃんのお弁当おいしそうっ！」

名前で呼ばれた。

でも、イヤな感じはしない。なんだろう・・・。不思議な感じがする。ポカポカ・・・する感じ・・・？

今までうるさい邪魔以外の感情で彼女達を見たことがないのに、なぜだか彼女達が「かわいい」と思えてしまう。なんだろう・・・？

「ホントだぁ！自分でつくってるの？」

もう1人のほうも私のお弁当を見てそう言う。

「ええ。料理好きだから・・・。」

2人の反応は同じもの。「そうなんだぁー！すごい」

料理が出来るのがそんなにすごいのだろうか？

私は、中学のときから朝ごはん・昼ごはん・晩御飯は自分でつくっ

ていた。それが、当たり前だと思っていたから。

・・・それに、つくってくれる人が居なかったから・・・だから、自分でつくる以外の選択肢がなかった。『あの人』が私のお弁当など作ってくれるはずがなかったから・・・。

だから昔は、みんなのお弁当が羨ましかった・・・。

・・・母親が作ったお弁当がある皆が・・・。

なのに、みんなは母親が作ったお弁当を不満そうに食べている。つくってる側の気持ちなどまったく考えたことなどないのだろう。

まったく・・・いい身分なものだ・・・。

・・・自分でつくったこともなくせに、口だけは一丁前に「おかあさんって料理が下手だからあー。」「ご飯超不味いー！」「マジあのかばあ手抜きだぜー！」なんて言っていた。

じゃあ、自分でつくればいいのに・・・。

しかも、文句をタラタラと言っている割には、ご飯粒1つ残さず完食して・・・。

だから人なんて嫌いなんだ・・・。

「私のなんてヒドイよおー（笑）」

「いやいや。私のほうがひどいって（笑）」

・・・あなたたちも中学の時のバカ共と同じことを言うの？
あなたたちのことは可愛いと思い始めたのに・・・。

「見てよく。何度つくっても上手くならないんだよおー。」

「いや、かわいいじゃん。私を見なさいよ（笑）朝早くつくってるにも関わらず、この下手さ加減（笑）」

まるで、自分でつくっているような口ぶり・・・どうせ、そのお

弁当もあなたたちの母親がつくっているんでしょ？

・・・それを、偉そうに・・・ッ！

・・・お弁当、別な場所で食べようかな・・・。

「おかあさんから料理習っておけばよかったなあ。」

「私のおかあさんは料理教えてくれる余裕ないしなあ。」

・・・え？

「・・・2人とも、自分で・・・つくってるの・・・？」

今まで黙って話を聞いていた私が割り込む。

だって、今の話し方だと・・・まるで・・・。

「そうだよ♪私はさあ、おかあさんが小6のときに死んじゃってさあ・・・。それから、自分でつくってるんだ♪」

「・・・で、私のほうは両親が離婚しちゃってさっ。おかあさんが働き始めて忙しいんだよねえ・・・。これでも私たち、家事全部やってるんだよ（笑）」

・・・知らなかった。

クラスにそんな人たちがいたなんて・・・。
似た境遇・・・。

「・・・そうだったんだ・・・。」

それしかコメントできなかった。

なんか、それ以上言うと泣く気がして・・・。

彼女達・・・それに私も・・・。

「うん♪でも、もう慣れたよ（笑）人間はじゅっ、じょんツ・・・
じゅお・・・」

「・・・順応力・・・？」

「そう！それが高くていいよねえ」（笑）」

「あっ・・・お弁当食べようか（笑）」

「スルーかい・・・（笑）」

「・・・フフ。」

笑った。

なんだか、おかしかったし・・・。

なんだろう・・・この人たちとは仲良くなれる気がする・・・。

生い立ち云々の前に、私はこの子達の性格が好きだと思ったから。

暗い過去があるにも関わらず、人を嫌うこともせず、そのくらい過

去を笑い飛ばしてる。

それが、とてもすごいことだと思った。

だから、仲良くなれる・・・というか、仲良くなってみたいと思っ

た・・・の方が正しい。

興味が湧いたんだ・・・。

この子達に・・・。

彰人視点 ヒルヤスミ

「さあ、昼休みだよ〜♪」

「お楽しみ♪拷問タァ〜イム♪」

「おい（笑）拷問ってなんだよ（笑）」

「さあ、彰人くん？素直〜に答えようかあ〜。あのナンパしていた子は誰なのかなあ〜？」

「だから、ナンパじゃないって。（笑）ただ話してただけで・・・」

「うん。わかったから。（笑）じゃあ、そのしゃべってた子は誰なの？」

う〜ん・・・。なんて答えるべきだろう。教科書を貸しあった仲？いや、完全に何か言われそう。（笑）でも、正直に言わないとこいつらは隣のクラスの奴に確認をとる。

よし、正直に言おう。

「教科書を貸してくれた子。」

よし！嘘はついてないし、なにより短く済んだぞ！これならこいつらもないも言うまい！

「それだけ？」「それだけじゃないでしょう？」「あつたことを全て包み隠さず話さない。」

言ってきたー。(笑) しかもこいつらはなんだ。(笑)
俺は、一応由佳ちゃんのことについて色々と話した。

いつも1人でいるから少し気になっていたこと。話してみると、笑顔の可愛い普通の女の子だったこと。などなど……。

「ふーん。じゃ、浮気とかナンパではないんだな？」

「ああ。最初からそう言ってるじゃん(笑)」

「ちょっと疑わしいけど……(笑) ま、一応白だろ(笑)」

「ギリギリセーフ(笑)」

「……もう何も言うまい(笑)」

「でも、お前気をつけろよ？」

「何を？」

「あんまそうやって優しくしてると、ストーカーとかされたりするぞ？」

「そ。お前は誰にでも優しくしすぎだよ。」

「そんな……(笑) ありえないでしょ。ストーカーとか(笑)」

「今の男女の恋沙汰は怖いんだぞ？好きなやつ殺したり、監禁したりさ。」

「……こわっ(笑)」

「笑い事じゃねっての。お前になんかあったら、俺ら葉月ちゃんに会わせる顔がないだろ！」

「いや。会わなくていいから（笑）」

「いいじゃないかよ！」

「1人モンにも少しぐらい幸せをわけやがれ！！」

・・・おいおい（笑）

でも、ストーカーか・・・本気でありえない。

由佳ちゃんは、真面目そうでそういうことしなさそうだし・・・、それに、いざストーカーされたとしても、スッパリ断るし・・・俺には葉月しかいないし・・・。

そういえば最後に見たときに、女子が由佳ちゃんに近づいてたし。多分、あの子達が友達になってくれるだろう。由香ちゃんに友達ができたみたいでよかった。

友達って、大切だと思うしな・・・。俺も、こいつらが居てよかったと思うし。何だかんだいっても、俺のことを心配してくれてる・・・。なんか、いいな。こういうの・・・。

「お前らも彼女作れば？（笑）」

「うわー！そんなの彼女のいるやつの発言だ！」

「できないから、悶々としとるのじゃー！」

「彼女できるもんならほしいわー！！」

・・・超ブーイング（笑）

こいつらといると飽きないな」（笑）気付いたら最近本読んでないし・・・。本どころじゃないもんな。

「やっぱ、お前は拷問してやる！」

「え？（笑）」

「そうだ！独りモンも反撃だ！」

「え？？（笑）」

「拷問開始ー！」

「「ラジャーー！！」」

・・・え~~~~

・・・拷問終了・・・？

「さ、スッキリしたところでメシ食おうぜ♪」

「・・・おい。」

「だな。なんか運動したら腹減っちゃったよ。」

「・・・おいってー！」

「さ、弁当弁当♪」

「俺を無視すんなよ! (笑)」

「どうした? 彰人 (笑)」

「かわいい。うさちゃんの着ぐるみきちやってさ…… (笑)」

「ウサギ年だからか……? (笑)」

「お前らがやったんだろ!」

「いや、文化祭で使ったうさちゃんがまだあってよかったよな。」

「かわいいかわいい彰人うさぎも見れたしな (笑)」

「ほんと、かわいいかわいい……プツ。」

「お前今プツて言ったじゃないかよ (笑)」

「言ってる言ってる (笑)」

「ていうか、イヤなら脱げばいいじゃないかよ (笑)」

「お前らが制服奪うから、脱げないんだよ!」

「え? 制服? なんのこと? (笑)」

「お前ら (笑)」

「フッフッフ…… (笑)」

「クッククック・・・（笑）」

「ハッハッハッハ・・・（笑）」

悪役三人組め・・・！（笑）

そんなこんなで、俺は昼飯をうさぎの着ぐるみで食べるはめになった・・・。

五時間目になってもなかなか制服を返してくれないし・・・先生がビックリしていた。

そして、先生も大爆笑で俺はそのまま五時間目を過ごすはめになり・・・6時間目もそのノリでそのままになってしまった・・・。
なんのイジメだ！

放課後になってやっと返してもらったけど、時すでに遅し・・・もう学校中に広まってしまった。

帰るときに、「あっ、彰人うさぎ（笑）」と声をかけられまくった・・・。

・・・悪夢だ・・・（笑）

由佳視点 カノジョ

彰人君に会った日から、お昼は彼女たちと食べるようになった。そして、帰りも彼女たちと一緒に帰る。

しかし、その日は2人とも部活らしく久しぶりに1人で帰った。いつもはおしゃべりな2人がいるから騒がしい帰り道も今日は静かだ。笑い声も私を呼ぶ声も聞こえない。…少し寂しいと思ったことは秘密にしておこう。

「…でさ、俺ウサギの着ぐるみ着せられてさー。」

横に曲がる道に聞き覚えのある声が聞こえた。毎朝会うたびにおはようと言ってくれる声。間違えるはずもない彰人君の声だ。誰かとしゃべっている感じだから、友達といっしょなのかな・・・？じゃあ、話しかけないほうがいいかな・・・。うん、話しかけないでそのまま帰ろう。帰り道に彰人君の声が聞けてよかった。

「ほんと？見てみたかったな。彰人君のうさぎさん姿・・・。」

・・・気のせいかな？女の声が聴こえた気がした。それに、彰人君って名前・・・呼んでた。誰だろう？気安く彰人君のことを呼ぶ奴は・・・。

「やめてくれよ。恥ずかしいなあ・・・。」

彰人君と笑ってる。なんだろう？同年っぽいけど、制服が違うからうちの学校の人じゃない。中学のときのお友達か何かかな・・・？それにしてもいいやに親しげだ。ぶつかりそうな位近い距離。今にも繋ぎだしそうな手。・・・何？まるで、カップルみたいじゃない・・・

・。

・・・まさか、彰人君には彼女がいたの？私、多分あなたのことが好きだったのに・・・。

・・・フフ。やっぱり、こんなもんよね。私の人生なんて。神様がくれた幸せかなって思ったのに・・・。残念。まあ、いつか。彰人君はいい友達。それでいいじゃない・・・。

・・・でしょ？・・・由佳・・・。

彰人視点 ハヅキ

由佳ちゃんに会った日から、友達によく言われる。変なことにはなるなよ？と。なるわけないじゃないか……。俺には、こんなに可愛い彼女がいるんだから……。

「……で？それからどうなったの？」

俺の話す話を楽しそうに聞いている。この子は俺の彼女の葉月。中学の時の同級生。付き合い初めてまだ1年も経ってないけど……。一応ラブラブカップルをしている……。今も、葉月と一緒に家に帰っている。高校は全然違うところに行ったけど、学校のある場所が偶然にも一致して毎日一緒に家まで帰っている。帰り道では、最近の出来事とか、テレビとか他愛のない話ばかりだけど、葉月はとても楽しそうに俺の話を聞いてくれる。

「…でさ、俺ウサギの着ぐるみ着せられてさー。」

「ほんと？見てみたかったな。彰人君のうさぎさん姿……。」

「やめてくれよ。恥ずかしいなあ……。」

冗談じゃない！あんな生き恥のような姿見せられるはずがない！！葉月にだけは一生見られたくない。あいつらも、なんでわざわざあんなもの持ってきたんだよー！ったく！！

「……ん？」

「どうしたの？彰人君？」

「いや、あそこに高校の友達が居た気がしたんだけど・・・。」

「・・・誰もいないわよ？」

「多分、気のせいだ。」

おかしいな・・・。確かに由佳ちゃんが居た気がしたんだけど・・・。
。どうやら気のせいだったみたいだ。

「それより、もうすぐバレンタインだけどチョコはホワイトがいい
?」

「ああ、ホワイトで頼むよ。」

「りょーかい♪」

・・・かわいい・・・。なんか、幸せしてるなあ。

この幸せが永遠に続いたとしたら、俺は幸せ死にできそうだなあ・・・。

「ニヤニヤしてどうしたの？」

「なーんでもない♪」

「なんなのよー！」

そのあと、なんでもない。なんかあるでしょ。の言い合いがずっと続いた。葉月の家まで言い合いが続いたもんだから、葉月のお母さんに「夫婦喧嘩は犬も喰わない・・・ってね。(わん!)」って犬

を向けられながら言われた。この犬もタイミング良く吠えるなよ（笑）ちなみに、この犬は葉月家の犬で、名前はコロ助。・・・名前をつけたのはお母さんらしい。

「ふふ・・・。ただいまーお母さん。コロ助え〜。」

「こんばんは。おばさん。じゃ、俺帰るな。」

「あら、寄っていかないの？」

「はい。もうすぐ晩御飯ですし。」

お婆さんは残念そうな顔をしてから、そう残念ね。と言って俺を送ってくれた。

葉月も、コロ助の肉球と一緒に見送ってくれた。・・・コロ助の肉球はいらなかったのに・・・。

さてと、明日も早いし・・・早く帰ろっど！

由佳視点 ワカッタ

・・・彰人君に彼女がいると分かって数日。

私は、割と普通に生活している。彼女たちと一緒に。彼女達・・・後で分かったことだが、彼女達の名前は恵子と水樹というらしい。我ながらもっとショックを受けるものだと思っていたが、意外と私は冷静だったらしい。何もなかったかのように生活をしている。今日だってそうだ。朝に彰人君とあいさつを交わし、昼に彼女達とご飯を食べて、今は帰り道を歩いている。彼女達は部活。なんだかこのシチュエーションはあの日に似ている。何かが起こる気がしていた。実際に起こった。私の人生全てを変えてしまったきっかけに・・・。

「いい加減にしろよ!!」

・・・ビツクリした・・・誰だろうか。

待って?この声・・・彰人・・・くん・・・?

「いつもいつも無言電話かけてきて・・・! いったい誰なんだよ!」

やっぱり彰人君だ・・・怒ってるみたいだけど・・・相手は誰なのかしら?

・・・マ・・・サ・・・カ・・・。

この間私が見た女は、彼女ではなくてストーカーだった・・・? 彼の前ではいい友達のような顔をして、裏では彰人君に無言電話をかける・・・。

なんてことだ・・・全然気付かなかった・・・。
今すぐ彰人君にこのことを・・・!

・・・待てよ・・・。

彰人君にこのことを伝えたら、彰人君はきっと傷付くだろう・・・。
それよりも、彰人君の知らないところでストーカー女を何とかすれ
ば・・・。彼を傷つけることなく、助けることもできる・・・。
そうだ、そうしよう・・・。

「・・・ったく！」

優シイ優シイ彰人君・・・。待ッテテネ。今、貴方ヲ助ケテアゲル
カラ・・・。

彰人視点 イヤガラセ

最近、すごく平和だった。彼女とも順調！今度彼女手作りのチョコを貰う予定……。幸せすぎる……。(笑)

由佳ちゃんも最近は朝のあいさつを交わしたり、少しばかり雑談をするくらい仲良くなり始めた。友達には由佳ちゃんのこととで相変わらず「浮気者！」「俺と葉月ちゃんというものがいながら！」と言われ続けている。面倒だから最近あまり反応しないけどね。(笑)
・・・そんな幸せだったのに、俺にいきなり嫌がらせめいたものが始まった。所謂無言電話……。何も言わず、ただただ俺の声を聞いているかんじだった。

無言電話が始まったのは……。1週間くらい前からかな……。別に害はないしいいかな、と思っていたけど、1週間も続くとさすがに面倒くさくなってくる。

P i P i P i ∴ P i P i P i ∴

・・・今日もまたきたし……。やっぱりいつも通り非通知。

「もしもし?」

一応、普通な感じで出てみる。ふざけた友達とかだったらヤダしね・・・。

でも、やっぱり返事はない。また耳を澄まして俺の声をじっくり聞いているかんじ。正直言って、めっちゃめっちゃ気持ち悪い。まだ「あなたのことをずっと見ています」とか言われる方が楽。相手の声がないのはすごくやだな。

・・・もしかして、俺に声を聞かれると誰だかばれるから話さないのか……。?ってことは、こいつは俺の知っている奴ってこと?

そう思うと急に怖くなって、つい声を荒げてしまった。

「いい加減にしろよ!! いつもいつも無言電話かけてきて・・・! いったい誰なんだよ!？」

相手からの返事はない。しばらくすると、相手は電話を切ってしまったらしい。プープーという無機質な音が聞こえる。

「・・・ったく!」

としか言えない。

こいつは本当に誰なんだ? まさか学校の友達とかか?・・・由佳ちゃん・・・? いや、ナイナイ。でも、こいつが俺の知り合いだとすると、住所や・・・学校のこと・・・葉月のことも知っているんじゃないのか・・・? だとしたら、非常にまずい。こいつが葉月や友達つらに何かするかもしれない。それだけは何んとしてもさけないと・・・!

あいつらは、おれが守らないと!!

由佳視点 アノ女

彰人君を助けるために、まず何をするべきだろう。

(1) あの女を説得。彰人君に近づかないように言うておく。
(2) 彰人君にあの女のことを言う。
(3) 彰人君と仲良くなり、あの女に彰人君には彼女がいるのだと錯覚させる。

(4) 上と似ているが、彰人君と本当に付き合う。

(2) はまずないな。彰人君を傷つけることになる。それだけは必ず避けなければいけない。

(1) も意味はないだろう。まずあの女が誰なのかすら分からない。それに、私なら知らない女のそんな話は決して聞かないだろうし、さらにストーリーカー行為をするようになるだろう。

(3) ・ (4) はどうだろう。

・・・そんなことをすると彰人君に危険が及ぶ可能性もあるな・・・。

・・・とりあえず、彼女が誰なのかを調べる必要があるだろう。

「・・・由佳？」

ああ・・・そうだ。

この娘達と一緒にいたんだっけ・・・。

「どうしたの？ 由佳。」

「なんでもないよ。」

「そう。あつ、そういえばこの間ね・・・。」

「ホント!? いいなあ〜!」

・・・面倒だな。考え事をしているときに話しかけられると集中力が途切れる・・・。
でも、しょうがないだろう。

彼女達といると、面倒だったりするけれど和むことも多いからな。

「由佳も今度一緒に行こうよ!」

「うん。いいね♪」

「やった。由佳と初デート!」

「デートって(笑)」

「3人で行くんだよー。私を忘れないでー(泣)」

はははは・・・!

やはり、いいなあ。

こういうのを友達というのだろうか・・・。今まで居たことがないから、よく分からないな。

・・・彰人君は、いつもこんな感じなのかな。

友達としゃべったり、笑いあったり、そんな楽しい感じなのかな。

・・・私は、今のこの感じがとても好きだ。

彰人君も好きなのかな・・・。

だとしたら、彰人君の幸せを壊そうとするアノ女が許せない!

・・・少し大胆な手を使うしかないな・・・。

まず、アノ女が誰なのか探る。次に彰人君との関係性。あと、この娘達とのデートも忘れないようにしなくちゃ。忙シクナリソウダ・・・。

彰人視点 アイツ

葉月を守るために、あの無言電話の奴をどうにかしなきゃいけないんだけど……。まず、どうすりゃいいんだ？ ……分かんねえ。

とりあえず、しばらくの間は俺が葉月の学校まで迎えに行って、下校中の葉月を守る。登校は、友達と一緒に行ってらしいから大丈夫だろう。

あとは、無言電話の相手が誰なのか調べてみる必要があるな。まず、ストーカーかただのイタズラ。考えたくはないけど、ストーカーだろう。

で、俺にストーカーする奴なんていたか？

^{あいつら}友達は、由佳ちゃんじゃないか……。って言ってた。

そういえば、由佳ちゃんなら前に帰り道に見たけど…あれは偶然だったんじゃない？

学校からずっと……。後をつけていた…？

でも待てよ……。俺は由佳ちゃんに電話番号なんて教えてないぞ……？

やっぱり違うのか。疑ってごめんね、由佳ちゃん。

帰り道も偶然か。偶然ってこわいねえ（笑）

……無言電話は後回しだな。

今は葉月を守ることだけ考えよう。あと、大丈夫とは思うけど友達^{あいつら}の身の回りのことにも気を付けておこう……。

あゝあ、こんな無言電話さえなければ葉月とイチャイチャして、友達とグダグダしゃべってる楽しい毎日だったのに……。

この電話野郎のせいで台無しだ・・・。

絶対捕まえてやる・・・！

由佳視点 ダイジョウブ？

結局4つも提案を出してみたけれど、実行できそうなものは1つもなかった。

思ったのだけれど、下手に私だけで考え込むよりもそれとなく彰人くんに話を聞いてみた方がいいんじゃないかな・・・。

「由佳ちゃん！おはよ。」

登校中に考えをまとめていると、ちょうど彰人くんと遭遇した。それとなく思っていたけれど、心配するあまりつい单刀直入になっってしまった。

「おはよう。あのさ、最近困ってることでもあるの？よく考え込んでいるようだけど・・・。」

最後のは不自然に思われないように付け足した。

さて、彰人君の答えは・・・？
あると言うかないと言うか。

「えっ！由佳ちゃんすごい。よく分かったね。実は最近無言電話が酷くてさ。」

彰人君ずいぶんとあっさり教えてくれるのね。

もう少し間が空くかと思ってたわ。

彰人君の話を聞くと、どうやら一週間ほど前から無言電話がかかってくるようになったらしい。

大切な人達にも危害が及ぶかもしれないと、周りを警戒しながら過ごしているから最近すごく疲れているらしい。

「そうだったんだ……。」

無言電話のことは知っていたけれど、怪しまれてはいけなから知らないふりをする。

それにしても、無言電話被害にあつてたならばまずは自分の身を最優先に考えるところを……、人の心配しかしていないなんて、さすがというか……彰人君らしい。

無言電話……普通に考えればストーカー。

……やっぱりあの女か。

「何か身に覚えはないの？　そういうこととしてきそうな人とか……。」

彰人君、あの女がそうなんだよ。とは言えない。だから、少し遠まわしにきいてみる。

「……いないなあ。」

もつとよく考えてみてよ……。彰人君。

あなたのすぐ傍にいるんだよ。あなたに付き纏っている人が……！

「……そっか。」

やはり、彰人君のことは私が守ろう。

どうせ彼では、周りの人のことで手一杯で自分のことにまで頭がまわらさそうだから……。

「というわけだから、しばらくの間周りで変なこととか起きるかもしれないから、気をつけて！

何かあったら、すぐ俺に知らせてね！」

「へ？私は関係ないでしょ？」

・・・彰人君のストーカーに私は関係ないだろうに。危ないのは、彰人君と周りにいる彰人君にとって大切な人だけ・・・。

「ダメだよ！由佳ちゃんだって、俺にとって大切な人なんだから！」

そういうと、少し照れた風になり「そういうことだから！」とだけ言っただけという間に走って学校に行ってしまった。

・・・今のは・・・告白・・・？

いやいや、告白じゃないにしろ、彰人君が私のことを大切だと言ってくれた・・・。

すごく嬉しい・・・！

私も彰人君のことがすごく大切・・・。

・・・この無言電話のことが落ち着いたら、彰人君に告白してみよう。

好きですって・・・。

・・・っと、その前に無言電話をどうにかしなきゃなんだ。

彰人君、私の大切な人。必ず、守る！

彰人視点 アリガトウ

結局、なかなかいい案は出なかった。

とりあえず、葉月には今日から葉月の学校まで迎えに行くからと言っておいた。「いいけど、どうしたの？」と言われたけど、帰りに話すからと言ってすぐに電話を切ってしまった。

本当は登校も一緒に行きたいけど、登校は高校で仲良くなった子と一緒に行ってほしいから無理だ。

でも、一応葉月のことはもう安心だろう。

あとは、学校の奴らだ。あいつらはいちいち家までお迎え〜ともいえない。学校にいる間は気をつけて見ているけれど、登下校や家でのことまでは分からないしなあ・・・。

はあ・・・、人のことを気にするって結構疲れるな・・・。

あつ、由佳ちゃんだ！

考え事してるみたいだけど、俺に気付いてないのかな？

「由佳ちゃん！おはよ。」

あいさつをすると、少し驚いたような顔をしてから由佳ちゃんもあいさつを返してくる。

「おはよう。あのさ、最近困ってることでもあるの？よく考え込んでいるようだけど・・・。」

「えっ！由佳ちゃんすごい。よく分かったね。」

・・・純粹に、驚いた。俺ってそんなわかりやすいのかな？
なんか、微妙にシヨックだ・・・。

うん。由佳ちゃんにも関係あることだし、ちゃんと話したほうがよさそうだな。

「実は最近無言電話が酷くてさ。」

由佳ちゃんに全部を話した。

一週間前から無言電話がかかってくるようになったこと、もしかしたら無言電話の奴が友達や大切な人たちに何かするかもしれない気にしていること。

それと、少し疲れてしまったことも・・・。

「そうだったんだ・・・。」

由佳ちゃんは、話をうん、うんと言いながら聞いてくれた。

最後にそうだったんだ、とだけ言って少し悩み始めた。

「何か身に覚えはないの？そういうこととしてきそうな人とか・・・。」

そういう事、つまりは無言電話。ストーカーをする可能性のある人。

・・・思い当たる人はいない。

由佳ちゃんにも、いない、と答えた。

由佳ちゃんは少し腑に落ちないという顔をしていたが、しばらくしてから、そっかと言ったけど、その顔はやっぱり納得したようには見えなかった。

由佳ちゃんは何を考えているのかは分からないけど、とりあえず・・・。

「というわけだから、しばらくの間周りで変なこととか起きるかも

しれないから、気をつけて！
何かあったら、すぐ俺に知らせてね！」

由佳ちゃんはきよとんとして、私は関係ない。と言っていたけれど。

「ダメだよ！由佳ちゃんだって、俺にとって大切な人なんだから！」

由佳ちゃんがさっきよりさらにきよとんとしている。

なんだろう、少し恥ずかしくなってしまった・・・。

そういうことだから！とヤケクソ気味に叫んでさっさと逃げ出した。

でも、間違ったことは言っていない。

由佳ちゃんを含めた学校の友達は何人にとってとても大切な人だ。

でも・・・他にも大切な人がいる。

・・・葉月。

友達も由佳ちゃんも・・・葉月も守る！

疲れていようが関係ない。この命に代えても皆を守るのだ！

由佳視点　好き？

その日、授業が全く頭に入らず気が付いたら放課後になっていた。ぼーっと帰りの準備をしていると恵子と水樹が近寄ってきた。

「由佳！行こう！」

2人がそう言う。いっしょに帰ろうってことだろう。手早く準備を済ませて彼女達の下に行く。

「よし！じゃ、行くよー！」

「んーと、あそこまで行くには・・・、あっちの駅に行って・・・。」

・・・あそこまで行く？

「どこか行くの？」

彼女達はやっぱりという少し呆れた顔をしている。
え？と思っていると恵子が説明してくれた。

「昨日デートしようって話してたじゃん。今度って言ってたけど面倒だから今日行こうって・・・昨日話してたんだけど、その感じだと覚えてないみたいね。」

そんな話したっけ？

昨日は色々考え込んでたから、全然覚えてないや。

「えっ！ごめん、すっかり忘れてた。」

「うん。だろうと思った（笑）あ那时的由佳上の空だったもん。」
楽しそうに笑う恵子。分かって何も言わなかったんだ。

さすがだわ（笑）

今まで必死に道順を調べていた瑞樹が顔を上げて私達のほうを向く。

「道順分かったよー！」

「よし、じゃあ行こうか。」

どこに行くのと言おうと思ったけれど、これ以上聞くと今度は瑞樹にまで笑われそうだからやめておく。

まあ、ついていけばそのうち分かるでしょ。

・・・1時間後、電車と徒歩で着いた先はどこかのデパート？

「・・・なにここ？」

ついポロリと言ってしまった。

それにすかさず反応したのが瑞樹。

「ここにね、おいしーいパフェがあるんだよ♪さあ、行くよ！」
「！」

「あっ、待ってよ！」

ずんずんと突き進んでいく瑞樹に慌ててついていく恵子。私もそれに急いでついていき、デパートの中へと入っていった。

瑞樹の言うおいしい〜いパフェのある喫茶店に入ると、見たことがある後姿があった。

「・・・彰人君？」

「へ・・・？ゆっ、由佳ちゃん！？」

やっぱり彰人君だった。凄くビックリしているみたい。言葉になっていないけど、もう目が「何でここに！？」と言っている。

「・・・お友達？」

彰人君の前の席にいた女性が不思議そうに言う。

この女は・・・！あの時のストーカー女！！

「うん、高校の友達。」

なんで彰人君といっしょに・・・
このストーカー女はなんで楽しそうに彰人君と話してるの！？

「そうなんだ。あつ、私は葉月です。」

名前を名乗られたからには、返事しなきゃダメだね・・・。

「・・・由佳です。よろしく。」

「よろしくね！由佳ちゃん。」

・・・なんか明るい子だなあ。それに、笑い方とかしゃべり方が微

妙に彰人君と似てる。

もしかして、彰人君の妹さんとか・・・なのかな？

そこに瑞樹や恵子が来て、彼女達もそれぞれにあいさつしていた。すると、パフェを食べて元気ハツラツな瑞樹が質問をする。

「葉月ちゃんは彰人君の彼女さん!？」

ねえねえねえ!としつこいぐらい言う瑞樹に彰人君と葉月は嫌がるでもなく、2人して顔を赤くしていた。

「やつ、あの、ちがつ・・・くはないんだけど・・・そうじゃなくて・・・。」

「わっ、私は・・・そんなんでは・・・。」

帰って来るのはアタフタとした言葉だけ。

少しイラッとした私達3人は同時に「どっち!？」と聞いたら、彰人君がやつと答えた。

「・・・付き合ってるよ。葉月は・・・俺の彼女だよ・・・。」

おおー!と言い、2人を質問攻めにする恵子と瑞樹。

でも、私はそんなことはできなかった。そんなことする元気はなかった。

・・・2人は恋人同士？

え?じゃあ、ストーカーじゃなかったの・・・?

あの時の言葉も、告白じゃなかった・・・。

私は告白できない・・・。

「・・・由佳ちゃん？どうしたの？」

質問を全て葉月のほうへ任せたらしい彰人君が私のほうに来た。魂が抜けたような私を心配しているらしい。

私は・・・最後の力を振り絞るようにして彰人君に質問した。

「彰人君は、葉月さんのこと好き？」

彰人君は恥ずかしそうにしながらも、愛おしそうな目を葉月に向けて言う。

「うん。俺は、葉月を愛してる。」

・・・俺ハ葉月ヲ愛シテル・・・。

彰人君は恥ずかしそうに頭をガシガシと掻くと、「彰人君く助けてく。」と葉月がヘルプを出したので彼女の横に戻って行った。

私は、呆然とするしかなかった。愛してる・・・彼女・・・彰人君・・・？

彰人視点 愛シテル

その日の放課後。パツパツと帰りの支度をして、すぐに葉月を迎えに行^{あいつら}った。

友達^{あいつら}が何か言っていたけど、かまっている余裕はなかった。一刻も早く葉月のところに行きたかった。

走って葉月の学校まで行くと、校門の前が葉月が待っていた。

「あつ、彰人君！」

はあ、はあと息を切らしながら向かう俺に、葉月はぱたぱたと手を振りながら迎えてくれた。

校門の前で息を整えるために少し話してから、いつもの喫茶店に行こうと言って駆へと向かった。

いつもの喫茶店とは、俺達の家^のそばにあるデパート内にある喫茶店で、最近^はパフェのおいしい店として雑誌に載ったりしている。ガヤガヤしてるわけでもなく、人が居すぎるわけでもない落ち着いたける隠れ家的な喫茶店で、俺と葉月はよく学校帰り^によっている。

「・・・で?どうしたの?」

「実は「・・・彰人君?」」

これから話そうというときに、誰かに名前を呼ばれた。

誰だよ、と思^いながらも振り返ると、そこには由佳ちゃんがいた。それから、由佳ちゃんのクラスにいる女子2人も。

「へ・・・?ゆっ、由佳ちゃん!?」

驚きのあまり、そんな分かりきっている言葉しかでない。
でも、なんでここに？

由佳ちゃんの家はこっちのほうじゃないはずだけど……。

「……お友達？」

不思議そうに葉月が俺に言う。

そっか、葉月は違う学校だもんな。知ってるはずないか。

「うん、学校の友達。」

葉月に由佳ちゃんたちのことを説明すると、納得したらしく満足！
という顔をしていた。

「そうなんだ。あつ、私は葉月です。」

あつ、今度は由佳ちゃんたちに葉月のことを説明してなかった。
いきなり会うとテンパるなあ……。

由佳ちゃんもあいさつをして、由佳ちゃんの友達らしい2人にもよろしくと言いつたりしていた。
なんか仲良くなってる……？

「葉月ちゃんは彰人君の彼女さん!？」

といきなり言い出す子がいた。
突拍子もない質問に俺と葉月は只管アタフタとして、言い訳じみたことを言っていると、3人に一齐に「どっち!？」とスゴイ声で言われてしまった。

葉月はまだ困ったみたいな顔をして俺の方を見るから、俺が意を決

して答えることに。

「・・・付き合ってるよ。葉月は・・・俺の彼女だよ・・・。」

由佳ちゃんの友達2人がおおーと言いながら、さらに質問をしてきた。

押され気味に軽く受け答えしていると、元気のなさそうな由佳ちゃんが見えた。体調でも悪いのかもと思ったから、質問を葉月に任せて由佳ちゃんのほうへ行って見た。

「・・・由佳ちゃん？どうしたの？」

少し辛そうにしながらも、由佳ちゃんも俺に質問してきた。

「彰人君は、葉月さんのこと好き？」

由佳ちゃんもかと思ったけど、少し葉月を見てから正直に答えることにした。

「うん。俺は、葉月を愛してる。」

やべっ！俺なに真面目に答えてるんだろ。しかも好きなの？って聞かれて何愛してるとか言ってるんだよ！？

恥ずかしさがピークを超えて頭をガシガシと掻いていると、葉月からヘルプが出たので由佳ちゃんの下を離れて葉月の隣に戻った。また質問攻めにあってしまったけど・・・

『俺は葉月を愛してる』

愛する葉月の隣で惚気るのもいいかな・・・と楽観的に考えられる

ようになった。

でも、質問しすぎじゃない？この2人（笑）
だれか助けて（笑）

由佳視点 邪魔スル女

その後、恵子と瑞樹が帰ろうと言うまで、意識を失ったような状態になっていた。楽しそうに瑞樹と恵子が話しているけど、私は無言でとぼとぼと歩く。

「由佳・・・？大丈夫？」

2人が心配そうに私の顔を覗く込む。大丈夫と頑張って笑顔を作った。でも、笑顔が崩れて・・・涙が出てきてしまった。

「・・・由佳。よしよし。」

恵子が優しく頭をなでしてくれる。余計に涙が出てきたけど、心は落ち着いた。しばらくして涙が止まっても、恵子はしばらくの間優しく撫でていてくれた。

泣き出してから立ち止まっていたので、デパートを出たときにはまだ薄ら明るかった空ももう暗くなり始めていた。私のせいで帰りが遅くなってしまった。でも2人は笑いかけてくれた。帰ろうか。と笑顔で言ってくれた。

・・・友達っていいものだ・・・。泣いたときにも迷惑をかけたときにも、優しい笑顔を私に向けてくれる。

なんて素晴らしいんだろう・・・。それにまた涙が出てきそうだったが、そこはガマンした。

落ち着いてきたら大変なことに気付いた。

「あっ！かばん忘れた！」

2人も気付かなかったらしく、あー！と言っている。

先に帰っててと言って、走って取りに戻った。2人とも抱持ってるのになんで私だけ忘れるのよ。

まあ、気が動転してたから仕方ないっちゃ仕方ないか。

結構歩いたからなあ……。走っても10分以上か……。めんどっ！

走っていると、彰人君と葉月ちゃんが見えた。声をかけようかと思っただけど、少し話しかけづらい。

どうしようと悩みながら見ていると、2人は……。キスをしていた。もう、外でしないでよね！と少し怒っている葉月ちゃん。それにごめんねと言っている彰人君。でも、2人とも顔を赤らめながら笑っている。

あつ、彰人君が鞆を2つ持ってる。葉月ちゃんは自分のを持ってるから、多分あれは私のだ。

彰人君、落ち忘れてた私の鞆持ってくれたんだ。よかった。走るの面倒だったんだよね……。ははは……。

せっかく、2人のおかげで落ち着いたのに……。もう、彰人君達のせいでまた取り乱しちゃうよ……。

フフフフ……………。

「由佳ちゃんは俺にとって大切な人だよ。」
うん。私にとっても彰人君は大切な人。

「由佳ちゃんは俺の彼女だよ。」
嬉しい。私、彰人君のこと大好きなんだよ。

「俺は、由佳を愛してる。」
私も、愛してる。

アハッ・・・・・・・・・・・・・・・・

私達は愛し合っているのに、邪魔をする女がいるね。

私ノ彰人君ニ・・・・付キ纏ウ雌豚ガイル・・・・。
迷惑ダヨネ・・・・待ッテテ・・・・今、助ケテアゲルカラ。

彰人視点 守ル女

由佳ちゃんたちが帰った後、俺は改めて葉月に話をした。

無言電話がきていて、ストーカーの可能性がある。最近、ストーカーが人を殺したりする事件があるから葉月も気をつけて欲しいということ。それと、できれば下校は今日の様に俺が学校まで迎えに行った方が安全だと思う。などなど・・・。

全部聞き終わった葉月は、ふーんと言いながらパフェを頬張っていた。

なんか・・・あんまり興味なさそうな感じ・・・。

「葉月！俺マジで話してるんだけど！」

すると、少しアタフタとしてパフェを食べていたスプーンを置いてごめんと言っしてしょげている。

・・・しょげてるのもかわいい！と思ったのは置いて・・・。さて、次は何について話すべきか、と悩んでいると葉月がおそろおそろといった感じで後ろのほうを指差して「あれ」と言っている。何だろうと思い後ろを見てみると、さっき由佳ちゃんたちが座っていた席に鞆が1つ置いてある。もう3人とも帰ったのに鞆があるってことは、誰か忘れたな・・・。

はぁ・・・普通誰か気付くだろ・・・。

「あれ、由佳ちゃんたちの鞆じゃない？」

「うん。多分そうだろうね。しょうがないから俺が持って帰って、明日学校で渡すよ。」

正直、今はそれどころじゃない。

今は何よりも葉月のことを大切にしなければ・・・！
ああ、いっそ監禁でもできれば簡単なのに・・・。

「んー、やっぱりおいしいー。」

考え事してる間にもう立ち直ってパフェ食ってるし・・・。うまそうに食ってるなあ。

・・・やっぱり、しょげてる葉月より幸せそうに笑ってる葉月のほうが断然かわいいな・・・。
あんな顔見てたら、こっちまで幸せな気分になるよ。
でも・・・

「ふう・・・、ごちそうさまでした♪」

幸せそうな顔は長続きしない・・・（泣）

「相変わらず食べるの早いねー。」

俺が少しあきれたように言うと葉月はニパツと笑って答える。

「おいしいものは、味わいつつ素早く食べるべし！これ私の鉄則よ。」

「・・・ぷっ、ははは・・・！」

それからはなんだか楽しくなって、ストーカーのことは忘れて葉月といつもみたいに・・・いや、いつも以上に楽しく話していた。

葉月もパフェをおかわりして楽しそうに話していた。

またパフェかよと笑うと、だっておいしいんだもんーとまた幸せそうな顔で食べていた。

ちよつとちようだい♪と言ったらやあだ♪と笑ってない目で言われてちよつと傷ついたのは秘密だ（泣）

「あつ、もうこんな時間！そろそろ帰ろうか。」

メールが来たと言って携帯を開いた葉月がそう言った。今何時だろうと俺も携帯を開いてみると、もう暗くなり始める時間になった。

「そうだな。あつ・・・かばん忘れんなよ（笑）」

「はぁ〜い♪」

――――

帰り道は帰り道で楽しくしゃべりながら帰った。

葉月はもういっぱいパフェ食べたかったなあ・・・と呟いていた。

まだ食べるつもりかよと思いつつも笑えた。

しばらく歩いた頃、話題はまたストーリーカーの話になった。

「ホント・・・気をつけてね？」

葉月は心配そうに俺に言ってきた。

「それはこっちの台詞だよ。まあ、俺が守るけど・・・でも、葉月自身も周りを気にして、危ないなと思うことがあったら警察に助けを求めたり、俺や友達に電話したりするなりしろよ？」

分かったと葉月は言っただけで、不安だ。

葉月にもしものことがあったらと思うと怖くて怖くてどうしようも

ない。

「・・・大丈夫！私のことは彰人が守ってくれるんでしょ？なら絶対安全だよ♪」

・・・不安がなくなったわけじゃない。でも、今から俺が怖がってたんじゃないか。大丈夫。葉月は俺が守るんだ。

「・・・ありがと。」

道端だったけど、周りに誰もいなかったし葉月にキスをした。一瞬ビククリとしていた様子の葉月も少しすると目を閉じて受け入れてくれた。

「もう、外でしないでよね！」

口を離すと、葉月は頬を赤く染め照れたような怒ったような顔をしながらそう言った。

ごめんと口では謝るけれど、口のにやけが止まらなかった。葉月は怒ったようなことを言いながらも笑っていた。

そのときは、映画に出てきそうなほどに幸せな景色だよななんてのが気なことを考えていたけれど、それは違った。

これが俺にとって人生を狂わせるきっかけを作る、最悪な景色だったんだ。もしここで俺がキスなんてしなければ、きっと葉月を巻き込むこともなかったんだ。

ゴメンナ・・・ハヅキ・・・。

由佳視点 殺シテヤル

私と彰人君の邪魔をする牝豚こと葉月ちゃん。

彼女自身に悪い印象はない。どちらかというと好印象なのだが、しようがないよね。彰人君に付きまとう彼女が悪いんだ。

・・・ただの勘なんだけど、彼女は彰人君のことが好きなんだろう。私も彰人君が好きだからよくわかる。でも、これだけは譲れない！彰人君は私のものだ！！

さてと…、私達の邪魔をする葉月ちゃんを排除するために私は今、葉月ちゃんの家の前にいる。

なぜ私が葉月ちゃんの家場所を知ってるのかと言うと、簡単なことだが彰人君のあとをつけたのだ。この前彼本人から「今日から葉月の学校まで迎えに行行って帰ることにしたんだ。」と言われたから。さすが彰人君よね。陰ながら私の計画の手伝いをしてくれるなんて私の計画・・・葉月ちゃんを殺すこと。

人を殺すのはちょっと嫌だけど、彰人君と私のために頑張らなきゃ♪

でも、学校の行き帰りには友達や彰人君が着いているから近寄れない。出掛けるのを待っているのだけれど、なかなか機会が巡ってこない。家から葉月ちゃんが出てくるのを待って今日でもう三日目。このかんじだとか今日もダメだろうな。そろそろ帰ろうかな・・・。

「じゃ、行ってきましたあす。」

「・・・！」

葉月ちゃんが扉から笑顔で出てきた。

それをお母さんと思われる人が犬を抱きながら見送っている。

・・・やつと、作戦が実行できる！三日間着続けたこの黒い服とも
ついにおさらばだ。この日のために買ったフードつきの暑苦しい黒
のジャージ上下。葉月ちゃんが始末できたらこれは捨てて、白い服
を買おう。それで彰人君とデートしよう！
ふふ・・・楽しみだなあ♪

・・・さてと、もう少し暗がりに行ったら殺そう。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

電燈でうつすら照らされた道で、私と葉月ちゃんの足音だけが響く。

コツ・・・コツコツ・・・コツ

心なしが葉月ちゃんの足音が少しずつ早まっていく。遅れをとらな
いように私もだんだん足早になる。

コツコツコツ・・・

・・・！気付かれたのか！？

葉月ちゃんがついに走り出した。バレたのか！？まあ、いいや。後
ろからこの包丁で・・・。

コツコツ・・・ハアハア・・・

あと・・・少し・・・！

「あっ！助けてください！変な人が・・・追いかけて・・・！」

葉月ちゃんが建物の中に入り助けを求めている。よく見てみると、

その建物は交番だ。

・・・さすがにこれは逃げたほうがいいな。

来た道に戻るように走り出すと、後ろから追いかけてくる足跡が聞こえた。

警察官が追いかけてきた！

横道に曲がったりしながら逃げて、なんとか警察官を卷いた。せっかく葉月ちゃんを殺すチャンスだったのに！！

これで、葉月ちゃんは警戒するようになるだろうな・・・。
襲うチャンスはほぼなくなる。

まあいい。また別な作戦を考えるか・・・。

彰人視点 守ッテヤル

P i P i P i P i . . . ♪

夜、風呂から上がってくつろいでいた時、携帯電話が机の上でけたたましく鳴った。こんな時間に誰だ？と画面を見てみると、『葉月』と表示されていた。

「・・・葉月？」

こんな時間に電話してくるなんてめずらしいな、と思い急いで電話に出た。

「もしもし。」

『あっ！もしもし、ごめん寝てた？』

「いや、別に起きてたよ。」

葉月の声は沈みこんだように元気というか、覇気がなかった。

「どうした？・・・何かあったか？」

『・・・実はさ、さっきなんか・・・変な人に襲われてさ・・・。』

「・・・え？」

恐れていたことが起きた…。このタイミングで不審者に襲われたって事は、ほぼ間違いなく無言電話の奴だろう。

「お前は・・・っ！なんでこんな時間に外に出たんだっ！」

俺はついつい怒鳴ってしまった。こんな時間に外に出るなんて確かに思うけれど、何も怒鳴ることはないだろうと自分でも思った。これはただの八つ当たりだ。葉月を守れてない俺へのイラつきを葉月にぶつけてしまった。

俺にはそんなことより言うことがあるだろう。夜道で知らない誰かに襲われて、葉月は怯えているはずだ。そこでさらに俺に怒鳴られたら・・・。

「ごめん・・・。怖かったよな。大丈夫だった？」

少し鼻をすする様な声が電話の向こうから聴こえた。やっぱり不安だったんだよなあ・・・。

『大丈夫・・・。』

あきらかに大丈夫ではなさそうな声で返事がきた。俺は、なんて声をかければいいんだろう・・・。

「・・・はい、はい。あっ、いや大丈夫です。はい・・・。」

次にかける言葉を悩んでいると、葉月が1人で話始めた。たぶん後ろにいる人に話しかけているのだろう。

後ろにいる人？　そういえば、葉月は今どこにいるんだ？

「葉月。今どこにいるの？」

「ん？　交番だよ。襲われそうになったときに、交番に逃げ込んだか

ら助かったんだ。」

交番か。というと、うんと少し元気になった声が帰ってきた。

「どこの交番？迎えにいくよ。」

いいよと言いい張る葉月を、少し強引になだめて迎えに行くことになった。

警察官には、迎えがくるまでもう少し居させてくださいと言うと、快くOKしてくれた。

俺は、最低限のものだけ持ってすぐに交番へと向かった。頭がまだ濡れていたけど、そんなことに構っている余裕もなかった。

交番につくと、葉月がイスに座ってお茶を飲んでいた。

「あっ、彰人くん！」

もう少し怯えている感じかなと思っていたけど、さすが葉月。

警察官にお茶とお菓子を出してもらい、ルンルン気分だったみたいだ。

俺が来ても、幸せそうにお茶を啜っていた。まあ、よかったんだけど・・・なんか釈然としない。

お茶も飲み終わった葉月を連れ、お巡りさんにしっかりとお礼を言っって交番を後にした。

「おばさんには連絡したの？」

さすがに少し気まずくて、無言でしばらく歩いていたけど耐えられなくて葉月に声をかけた。

「うん。彰人君が迎えに来てくれるって言ったら、家で待ってるねって言ってた。」

おばさん。なんだか凄く俺のことを信頼してくれてるかんじ？
うれしいけど、親から娘を任せたいなことを言われると、かなり責任重大でプレッシャーに負けそう。

「・・・葉月。俺と1つ約束してほしいんだ。」

プレッシャーも増し、今回のこともあったから、どうしても葉月に言っておかなければいけないことができた。
真面目な顔で話し始めると、葉月も真面目な顔をして俺の話をきいてくれた。

「夜、外出しないこと。どうしても出なきゃいけない用事的时候は、俺に連絡して。送り迎えするから。
わかった？」

葉月はわかった。と言ってくれた。
話し終わったときに、ちょうど葉月の家に着いた。家に着くと、おばさんが家の外で葉月の帰りを待っていた。
お母さん！と駆け寄る葉月を、おばさんは優しく抱きしめていた。
これは親子のことだな、と邪魔をしないように帰ろうとすると、おばさんに引き止められた。

「彰人君。迎えに行ってくれてありがとうね。
それだけで、葉月も心が楽になったと思うの。ありがとう。
こんなときをお願いするのもどうかとは思っただけど・・・
葉月のことを、お願いね。」

いつもおチャラけているおばさんがこんなにも真剣な表情で俺に話しかけてきたのは、初めてのこともかもしれない。

おばさんは『母親の顔』をしていた。我が子を大切に思い、守ろうとする母親の顔。

そんな真剣な『母親』からお願いに、俺ははい、とだけ答えた。

すると、おばさんはにこっと笑っていつものおばさんになっていた。・・・今思うと、おばさんにはなんとなく分かっていたのかも知れない。これから起こることが。だから、わざわざ俺にこんなお願いをしたのかもしれない。

今となっては、もう分からないことだけれど・・・。

手を振り俺を見送ってくれたおばさんと葉月に、別れを告げて俺は家へと帰った。

由佳視点 新シイ作戦

葉月ちゃんを襲ってから三日目。

彼女は学校以外で一步も外に出なくなった。唯一外出する学校も彰人君が送り迎えをするようになった。

出てこないかと一応家の前を見張っているけど、彼女の家から出てくるのは母親だけだった。

「このままじゃ埒があかない・・・。」

慌てて口を両手で押さえる。

1人なのを忘れてつい独り言を言ってしまった。でも、本当にどうしようか。

新しい作戦・・・。燻り出し作戦・・・がいいかな。

彼女が出てこないのならば、彼女の周りの人を殺して「お前が出てこなければもっと人が死ぬ」と脅す。

我ながらなかなかいい策だと思うのだけれど。

・・・昔、何かの本で読んだな。人を最も残酷に殺す方法。その1つに、「殺したい人がいるならば、親しい友達や家族から順々に殺していき、弱ったところを狙い殺すのだ」と。

あの頃はよく分からなかったが、今なら分かる気がする。

彰人君や友達を先に殺され、自分だけが最後に残ったら苦しくて、悲しくてもういっそ殺してと思ってしまう気がする。

あれ？

私友達なんていたっけ？

名前・・・なんていったけ？

かおる？ ゆうこ？ なお？

まあ、いつか。

よし！ さっそく燦り出し作戦をもっと細かく計画しなきゃ♪

・・・細かい計画はこうだ。

まず、葉月ちゃんのお母さんを殺す。でも、お母さんだけ殺すと疑われてしまう可能性があるから、関係ない人を殺す。ついでに、家にいる「あの人」も殺してしまおう。一石二鳥♪ 私には得しかない。よし、じゃあ作戦開始！

まずは母親カラ・・・♪

「葉月！ じゃあお母さんは買い物に行ってくるから、戸締りに気をつけるのよ！」

葉月ちゃんを襲ったときと同じ格好で家を見張っていると、中から母親が出てきて、わかったと言う葉月ちゃんの声がした。

どうやら葉月ちゃんは家にいるようだ。葉月ちゃん、あなたは後悔することになる。この危険な夜に自分は家に隠れて、母親を外に出してしまったことを。

自分ヲ呪エ！！

母親は私には気付いていないようだ。騒がれても面倒だし、さっさと殺ってしまおう。

前を歩いている葉月ちゃんの母親に、足音が出ないように走りよっていき、隠し持っていた包丁を背中に突き立てた。

葉月ちゃんのお母さんはこちらを振り返りながら、小刻みに震えて

いた。そして、背中に刺さった包丁を引き抜いて私の方にふらふらと近づいてきたのだ。

「あんたが・・・葉月を…！」

背中と口からはすごい量の血が出て、今にも倒れそうなくらいふらふらとしているのに、歩くのをやめようとしなない。

私が少し押せば、きっと彼女は倒れ二度と動かなくなるだろう。

でも、出来なかった。それどころか、指一本動かすこともできず、息を吸うだけで精一杯だった。

じわりじわり、と近付いてくる包丁を見ると、殺される！本当にそう思って目をぎゅっと瞑った。

カチャンという音と一緒に、おなかのあたりに生暖かい感触が広がった。

刺された！と思い、おそろおそろ目を開けると、そこには私のおなかにしがみついた葉月ちゃんの母親がいた。

生暖かったのは、血まみれの彼女がしがみついてきたから。カチャンというのは、彼女が包丁を落とした音だった。

しがみついたまま動かない葉月ちゃんのお母さん。首筋に手を当ててみると、もう脈がなかった。

「・・・死んだ。」

分かりきっている事をなぜだか口に出していた。

頭の中を整理しなかったんだ。

「フフ・・・死んじやった。」

なぜだか、すごく可笑しかった。

だって、彼女は自殺したようなものよ。自分で包丁を抜いたりした

から死んだのよ。

包丁を抜かなきゃ、死にはしなかっただろうに。

バツカみたい♪

やることもやったし、さっさとかーえろっと♪

彰人視点 俺ノ作戦（前書き）

更新が遅れ、申し訳ありません（；>|<；）

彰人視点 俺ノ作戦

葉月に外出禁止と言ってから、三日後。

俺は毎日、葉月の学校の送り迎えをした。おしゃべりをしながら登下校するのはめっちゃめっちゃ楽しかった。葉月の自由を束縛して、葉月のお母さんに迷惑ばかりかけているけど、安全のためには仕方のないことだ。

今日も葉月を送り届けて、家でまったりとしている。

「今日も無事に一日が終わったあ・・・」

安心してベットに寝そべっていると、うとうととしてきてしまった。・・・携帯が鳴っているのにも気付かず・・・。

「ん・・・？うあ、朝かあ。」

そのまま寝てしまっていたらしく、気付いたときには朝だった。寝ぼけ眼で時計を見ると、朝の9時。遅刻だと思い、急いで準備しはじめてやっと気付いた。

「今日、土曜日じゃん…。」

もう制服着ちゃったよ。脱ぐのが面倒だから、そのままでもたベツドに倒れ込んだ。その状態で携帯をちよっとイジイジ・・・。

「ん？昨日の夜に葉月から電話が入ってる？」

留守電には何も入っていないが、かなりの着歴がある。
何かあったんだ！！

俺は急いで葉月に電話をかけ直した。何回かコールして、やっと電話に出た。

「葉月！！大丈夫か！？」

葉月が声を出す前に、俺はめっちゃくちゃにしゃべりまくった。だって、葉月になにかあったかと思うと落ち着いてなんかいられなかった。

葉月は押し黙っている。まず、今電話に出たのは葉月なのか？と不安になる。

もう何もかもが不安になってきた。

『・・・彰人君。』

葉月はやつとしゃべった。

そのことで少し不安が減ったけど、それでもまだまだ不安だった。だって、葉月の声は今にも消えてしまいそうな・・・しゃべるのがやつとみたいな声だったから。

『何があった？無事か？』

葉月が泣いているのがすぐに分かる。

あの時といっしょだ…！

葉月が襲われて、俺は助けるどころかその場にすらいなかった。

俺は…役立たずだ！

『私は無事だよ……。でも・・・、お母さんが……。』

おかあさん・・・？おばさん！？

一瞬理解ができなかった。あの明るくて強くて・・・力強い母親の

顔をしたおばさんが襲われたのか!?

「それで、おばさんは大丈夫なのか!？」

葉月の声が更に涙声になる。いやな予感しかない。

『・・・死んだ。いや、殺された。』

・・・イヤな予感と言うのは、よく当たるものだ。

殺された・・・という言葉のときの葉月の声は、あきらかに殺意がこもっていた。

次、あの無言電話のやつに会ったら、葉月はそいつを殺してしまうだろう。

その前に俺がどうにかするんだ!

「葉月。お前のことは俺が守るから。おばさんに頼まれたんだ。絶対守るから・・・!」

「うん…。」

葉月には気の抜けた返事しか返ってこない。

でも、いいんだ。これは俺に言い聞かせる言葉だから。守る…守るんだ!

そのために、俺がおばさんを殺した奴を見つける。きっと葉月の家のそばをうろうろしているはずだ。

今日から早速夜に葉月の家の周りを見張ることにしよう!

待ってろよ! 必ず捕まえてやる!!!

由佳視点 見ツカッタ

葉月ちゃんのお母さんを殺してから、今1ヶ月が経っている。

その間に、全く知らないサラリーマンのおじさんと、茶髪の女子高生を殺し、家の「あの人」を殺した。

「あの人」を殺したら、色々な人に同情された。学校の人や近所の人、それに彰人君にも。

ちよっぴり嬉しかったな♪

さて、そんな私は今日も殺す相手を求めて夜道をうろろとしている。

ここで突然殺人を止めたら、怪しまれてしまう可能性もあるから、次の人を殺したら最後にしようと思っている。

おっ、夜道を1人でうろろしている人はっけーん♪

いつもの黒い上下の服のポケットからタオルに巻いた包丁を取り出す。手早くタオルを取り、足早にうろついている人に近づく。

暗いから顔は見えないが、学生服を着た男子のようだ。

あれ？よく見ると、私と同じ学校の制服じゃないかな？

同じ学校の生徒！？

この辺りに、同じ学校の生徒なんていたっけ？

まあ、いっか♪

気にせず刺し殺しちゃいましょう！

もうすぐ背中に刺さるといふとき、制服姿の男子がこちらに振り向いた。

背中には刺せなかったけど、腕のところを刺すことに成こ・・・っ！？

「いっ…たあ…！」

あつ、彰人君・・・！？

どっ、どうしてここに！？

とっ、とりあえず逃げなきゃ！！

「てめえ…！待て！」

走り去ると、後ろから彰人君が叫ぶ声が聞こえた。彰人君のあんな声聞いたことなかった。

すぐく恐かったけど、足を止めずに家にダッシュで帰った。
家に着くと、涙が止まらなくなった。

「あつ、私…彰人・・・君・・・をッ！なんてこと…！」

彰人君を刺してしまった。彰人君を守るために始めたのに、何して
るんだろう…。

通り魔はこれで最後にしよう。もう十分だろうし。

もう、殺す人は葉月ちゃん一人でもいい。これ以上、彰人君を傷付け
る可能性のあることは避けなければ。

あつ、刺した彰人君をそのまま放置してしまった。大丈夫だったか
な？

彰人君すごい声で叫んでたから、多分近所の人が様子を見に行くだ
ろう。心配だけど、信じるしかない。

・・・それにしても。

「彰人君はこんな時間に、あんなところで何をしていたんだろう？」

明日聞いてみよう。

最近、私が起こした通り魔事件で夜道は気を付けてくださいってテレビとかで散々やってたのに、危ないなあ。明日少しお説教しなきゃ！

心配と不安が入り雑じって、怒りに変わった。さっきまで、どうしようとかあたふたしてたのに、変な感じ。

ふふ…はやく明日にならないかなあ。

彰人視点 見ツケタ

葉月のお母さんが殺されてからの葉月は、ひどかった。

何を言ってもぼーっとしているし、かと思うと殺意に満ちた鋭い眼で考え事をしているし。

俺も、大好きなおばさんが死んで悲しかった。

・・・俺の大好きなおばさんを殺し、優しい笑顔の似合う葉月を泣かせたり、あんな殺意のこもった顔をさせた犯人が許せない。必ず犯人を見つけ出てやる！！！！

・・・そんなことを考え、犯人を見つけ出すために毎日夜道を歩き始めること1ヶ月。

その間に、通り魔はサラリーマン、女子高生・・・そして、由佳ちゃんの大切な人にまで手をかけた。

由佳ちゃんは悲しくないはずがないのに気丈に振舞って、笑っていた。

それを見るのは痛々しくて、さらに犯人に対する怒りがこみ上げてくる。

あいつは・・・俺が狙いだっただけなのに、だんだん俺の大切な人ばかりを狙うようになった。

許せない！捕まえてやる・・・捕まえてやる！！！！

「・・・ふう、さむッ・・・。」

冬場に毎日夜道を歩くのは、ツライものだ。

なかなか見つからないなあ。一応、襲われた場所の近くをうろちよろしているのだけど・・・。

さすがにそう簡単にはいかないか。今日はそろそろ引き上げるか。

帰ろうと思って振り返ると、キラリと光るものが肩の向こう側から出てきた。

きよんとすると、腕のところはぴりぴりと痛み、腕とキラリと光るものが少し赤く見えた。

そこで初めて、キラリと光るものがナイフだと理解できた。

「いっ…たあ…！」

痛みと驚きで、頭がついていかない。

殺される？

葉月がまた泣いちゃうかなあ？

おばさん…。

葉月…。

死ぬ前にこいつの顔を…！

街頭がなく月明かりすらない暗い道で、黒い上下の服を着たそいつの顔は、フードを被っていて見えない。

見ようと必死に覗き込んでいると、そいつは俺に止めを刺すこともせずに、今来た道を走り出した。

「てめえ…！待て！」

必死に叫ぶが、そいつはもう俺の目の届かないところまで走りさってしまった。

クソツと地面を叩が、意味もなくただ手がジンジンするだけだった。しばらくすると、近所の人が俺の叫び声を聞いて出てきた。

「大丈夫ですか!？」

「一体何事!？」

「救急車と警察をよびますね！」

俺を心配してくれる人と野次馬が集まり始めた。

その後は、救急車で運ばれるは警察の人に色々と言われるは・・・大変だったあ。

「彰人! 大丈夫!？」

家に帰ってみると、葉月と家族が待っていた。

警察が家に電話し、家族が葉月に電話したのだ。

なんで?と聞くと、彰人君に何かあったら私に電話してください、と葉月に言われていたらしい。

「大丈夫だ「大丈夫じゃないじゃない! 腕!!!!!!」

くい気味に言う葉月。そのあと、何度も何度も心配されて怒られた。

「大体ねえ、彰人君は危機感が足りないのよ! もし、それが腕じゃなくて背中や胸になんて刺さってたら、死んでたのかもしれないのよ!？」

お母さんみたいに・・・私を置いていく気!？」

「・・・ごめんね。」

謝る俺に、葉月は許さない！と言いながらも笑顔で許してくれた。
葉月のお説教が終わると、次は母さん。

「まあ、大体は葉月ちゃんと一緒なんだけどね・・・。」

ここから始まる母さんの説教は、その後1時間には及んだ。

警察の人にもさっき叱られてきたのに、その後こんなにも叱られる
なんて・・・。

・・・もう、すごく反省しました・・・（汗）

由佳視点 彰人君！

彰人君を間違って襲ってしまった次の日。

「なぜあんな時間にあんな場所にいたのか？」を聞くために、私は彰人君の教室に来ていた。

「あつ、彰人君！」

教室で友達とおしゃべりをしていた彰人君を、教室の扉のところから声をかけた。

さすがに、教室のなかに入るのはちょっと・・・ね。

「ん？あつ、由佳ちゃん。」

声をかけると、割とすぐに教室の扉のところまで来てくれた。今まで彰人君と話していた友達がひそひそと話し始めた。

「彰人の彼女！？」

「バカ言え！」

「そうだよ！違うって。」

「そうだよな・・・。」

ふふふ・・・。バカな人たちね。

あなた達の考えている通り彼女よ！全く鈍い人たちね。

女子が男子の教室まで来て呼び出すなんて彼女以外に考えられないじゃない。

「ごめんね。お友達と話してる最中に・・・。」

あんな人たちというより、私という方がいいに決まっているのは分かりきっていたけれど、一応申し訳なさそうに言う。

「大丈夫だよ♪で、どうしたの？」

笑顔で言う彰人君に、釣られて私も笑顔になる。

なんかささやかな幸せってカンジ♪

おっと、微笑ましくなるために来たんじゃないかった。何の為に彰人君の教室まで来たのかを思い出して、改めて少し顔を強張らせる。

「あの・・・実はね・・・。」

私がそこまで言うのと、彰人君は顔を真っ青にして私の肩をガツと掴んだ。

「まっ、まさか！由佳ちゃんもあいつに襲われたの！？」

あいつ・・・というのが、なんとなく通り魔（私）のことを言っているのだと分かった。

「ちっ、違うよ！」

「はぁ、よかったぁ。」

私が力を込めて否定すると、全身の力を抜いて安心していた。

そんなに私のことを心配してくれていたんだ、と思うと嬉しくて嬉しくてどうしようもなかった。

「心配してくれてありがとう♪」

そう言うと、彰人君は少し赤くなっていた。
照れてるのかな？（笑）

「でっ！一体どうしたの？」

照れ隠しなのだろうか、わたわたと話を変える。
すっかり忘れていた・・・（汗）

「あのさ、昨日夜道を歩いてたよね？あんな時間に何してたの？」

「ん？ああ・・・実はさ・・・。」

彰人君は、葉月ちゃんのお母さんや「あの人」を殺した通り魔を探
すべく、毎日夜道を歩いて探していたらしい。

「・・・ッ！」

バカらしくて言葉も出てこない。
この人は本当に・・・！

「彰人君はいつもいつも人のことばかり！！
もしかしたら背中に包丁が刺さって死んでたのかも知れないんだよ
！？

なんで・・・なんで・・・人のためにそんな無茶ばかりするのよ・・・
。。。」

私は泣いていた。
刺そうとしたのは私なのに、実に自分勝手なことである。

「ふふ……。由佳ちゃんだって人の……。俺のために泣いてるじゃん。一緒だよ。」

言葉が出てこなかった。

私は『彰人君』のためだけでしか泣けない。

でも、彰人君は誰のためにも泣けるし、優しくもなれる。

「私は・・・違うよ。」

「うん。一緒♪」

やっぱり・・・違ふよ。

私と彰人君では、何もかも。

「あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「彰人が女の子泣かした!!!!!!!!」

「おまつ！ 何したんだよ！」

「謝れ！とにかく謝れ！！」

遠巻きに見ていただけの彰人君の友達がヤンヤヤンヤと出てきた。

彰人君は、またわたわたとして友達をなだめていた。

楽しそうに笑う彰人君を見て満足したし、そろそろ私も教室に帰ろう。

心のなかでバイバイと彰人君に言って、私は自分の教室へと帰った。

彰人視点 由佳ちゃん? (前書き)

またまた更新が1日遅れてしまいました(><;)
申し訳ありません(;;ω;;)

彰人視点 由佳ちゃん？

由佳ちゃんは違うと言い張るけれど、やっぱり由佳ちゃんはいいい子だと思う。

俺のために泣いて、俺のために悲しんで、心を痛めてくれた。そんな優しい由佳ちゃん。

「・・・なんでこの状態の俺を放置したのおく？」

「彰人！話を誤魔化すな！！！」

「そうだ！なぜ女の子を泣かした！？」

「正直に白状しろ！」

「葉月ちゃんに報告するぞ！！！」

ほんと、優しい子じゃなかったの！？（泣）

「落ち着けてお前達！！！」

「これが落ち着いていられるか！」

「このっ！浮気者！！！」

「鬼！鬼畜！！ドS！」

「・・・ドSっておかしくねえ？」

「はぁ・・・。」

俺は、葉月のお母さんが殺され、葉月が時折殺意に満ちた目をするようになったこと。

さっき教室に来ていた女の子、由佳ちゃんのことなんかも話した。ここまで人殺しを繰り返す通り魔を・・・、葉月をあんな目に変え

た奴を許すことが出来ず、毎夜出歩いては通り魔を探していたこと。そして前日、その通り魔に出くわし胸を刺されたこと。由佳ちゃんに、そんな無茶なことをしないで。と泣きながら怒られてしまったことを話した。

「なっ、なっ、なっ!!!」

「なんでそんな大事なことを黙っていた!!!」

「おまっ! その腕の傷は、運悪く針金のある場所で転んでできた傷だって言ってたじゃないか!」

「俺らをのけ者にすんな!!!」

「ごめん、ごめん。家族と葉月にしか話して・・・なく・・・?」

そうだ。家族と葉月にしか話してないはず。

『もしかしたら背中に包丁が刺さって死んだのかも知れないんだよ!?!』

ナンデ・・・由佳チャンガ、『背中に包丁が刺さりそうになった』コトヲ知ッテイルンダ?

「由佳・・・ちゃん?」

俺は急いで由佳ちゃんを追いかける。

追いかけると言っても、由佳ちゃんはどうずっと前に教室へと戻ってしまっている。

教室にいてくれるといいんだけど・・・。

「あっ、彰人?」

「おい! どこ行くんだよ!!!」

「もうすぐ授業始まるぞ！」

「彰人！！！」

あいつ等の俺を呼ぶ声が聴こえたけれど、今はそれにかまっているヒマはない！

もしかしたら・・・、もしかしたら・・・！！

落ち着け！俺！！

急いで答えを出そうとするな！
考えられることは、2つある。

1. 由佳ちゃんは俺が刺されそうになっていたところを見ていた。
つまりは、目撃者。

2. 由佳ちゃんは俺を刺した本人。つまりは、由佳ちゃんこそが通り魔。

1であってくれ！！由佳ちゃん！！！！！！

由佳視点 1 o r 2

彰人君と別れた（一方的に去っただけなのだけれど）後。

次の授業の準備をしたり、おそらく『友達だと思われる子』たちとおしゃべりをしたりしていた。

すると、いきなり彰人君が教室に入ってきた。

「・・・由佳ちゃん！」

息を荒げている。おそらく教室から急いで走ってきたのだろう。

私の教室と彰人君の教室は、棟が違うので走ったとしても少し時間がかかる。

もうすぐ授業が始まるうというのに時間を気にせずそんなに急いで来るということは、余程のコトなのだろう。

「どうしたの？彰人君。」

まだ少しハアハア・・・と言っている彰人君。一体何事だ！？とこちらを見ってくるクラスメイト達。

チッ・・・ウザったいな・・・。

「とりあえず、場所を移しましょう。中庭でいい？」

彰人君は、答えることが出来ないのかゴホゴホと咳をしながら頷いた。

「ちよっ、ちよっと！もうすぐ授業始まるわよ。由佳！」

『友達らしい1人』がそう私に声をかけてくる。

舌打ちをしそうになったが、無理矢理笑顔を作った。

「ごめん。先生に私は・・・早退しました、って言うておいて。」

少し訝しげな目をしていたけれど、そんな事は気にしていられなかった。

彰人君を連れて、中庭の方に行こうとしたけれど、少し落ち着いたらしい彰人君が私を制した。

「中庭はやめよう。外に出ない？」

優等生な彰人君がそんな事を言うなんて思いもよらなかった。
余程のこと・・・一体何なんだろう？

「いいよ。彰人君鞆とかは大丈夫なの？」

「大丈夫。行こうか。」

どこへ行くかは分からないけれど、とりあえず彰人君についていく事にした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ここは・・・。」

「そう。結構前にここで会ったよね。俺の知ってる中で一番うまいケーキ屋♪」

・・・葉月ちゃんと初めてしゃべった場所。『友達らしい人2人』

と一緒に来たところ。
おいしいパフェがあるところ。

席に着いたら元気で可愛い女の子が来た。

『いらっしゃいませ♪ご注文はお決まりでしょうか?』

「あつ、由佳ちゃんはどうする?」

「私はコーヒーで。」

「分かった。じゃあ、コーヒー1つとミルクティー1つください。」

『かしこまりました。コーヒーとミルクティーですね。少々お待ちください。』

さっきと同じく元気な声だが、その動きは無駄がなくしつかりとした足取りで、かわいいのに少しかっこよくもある。

「ああいう人・・・理想だなあ。」

心の中の独り言のつもりが、ついつい口に出してしまった。

恥ずかしくて口を手で押さえるけど、もう出て行ってしまった言葉は返ってこなかった。

「ん? ああ、あのウエイトレスさん? かわいいのにきびきび動いてかっこいいよね。」

同意見・・・(照)

恋人同士・・・似たもの同士・・・似てくるカップル・・・(照)

1人で色々想像して顔を真っ赤にしていると、先程のウエイトレスがコーヒーとミルクティーを持ってきた。

『お待たせいたしました。コーヒーとミルクティーになります。』

ウエイトレスが立ち去り、それぞれ自分の飲み物を一口飲んだ。

そこで、明らかに彰人君の顔が変わった。真面目な顔というか・・・。言いにくそうにしていた。

意を決したように真っ直ぐ私を見て、彼は私が思っても見なかったことを言った。

「1と2・・・どっちかな？」

「・・・は!？」

彰人視点 1ダヨネ？

「あつ、ごめん！違くって、ん〜と・・・。」

説明もなしにいきなり『1と2どっち？』なんて言われても普通分
からないよなあ・・・。

頭の中でもう1度整理してから、由佳ちゃんに説明を始めた。

「あのさ、今日俺に、『昨日の夜、あんな時間に何してたの？』つ
て聞いたよね？」

由佳ちゃんは不思議そうな顔をしながらも、うんと答えてくれた。

「それで、通り魔を探してるって言ったら、『そんな危ないことし
ないで。』って言ってたよね。」

また由佳ちゃんは不思議そうにうん、と答える。

「たださ、由佳ちゃんこうも言ったよね？『背中を包丁で刺されて
死んじゃうところだったんだよ』って。」

さすがに俺の言いたいことを察したのか、由佳ちゃんはもう、うん
と答えてくれなくなった。

それでも俺は続ける。

「なんで知ってたの？俺が襲われたこと。」

「ニュースで見たから・・・。」

少し困ったように笑いながら答える。

・・・残念だよ。由佳ちゃん。

「ニュースじゃ俺の名前は出てないんだ。」

一瞬言葉に詰まりながら、由佳ちゃんはこう言う。

「あつ、住所が彰人君の近くだったから、高校生って言ってたし・・・。」

明らかに苦し紛れな嘘をつく。由佳ちゃん・・・！

「由佳ちゃんに家の場所・・・教えたことないよね。なんで俺の家知ってるの？」

「それは・・・。」

また言葉に詰まる。

「それに、なんで『背中』を『包丁』で刺されそうになったことを知ってるの？」

まだ、ニュースでは凶器が包丁だ、なんて報道はされていないし。俺がケガしてるのは腕。『背中』を刺されそうに、なんて誰も知らないはずだけど。」

もう、由佳ちゃんは苦し紛れの言い訳も、言葉に詰まることもしない。

選択肢を聞く必要すらないのかも知れないけど・・・。
最後の望みを・・・。

「由佳ちゃん……。俺の考えは2つ。

1つ、由佳ちゃんは俺が刺されそうになったところを目撃した。だから色々知っている。

2つ、由佳ちゃんは……」

さすがになかなか言い出せない。

今度は俺のほうと言葉に詰まってしまった。

「通り魔の犯人なのではないか。だから、彰人君が背中を刺されそうになったことも、凶器が包丁なのも知っているんじゃないか。……かな？」

言葉に詰まった俺の変わりに、しゃべってくれたのは由佳ちゃんだった。

その顔は、へんに清々しい顔をしている。さっきまでの顔ではなく、まるでイタズラしているところを見つかってしまった子供のようだ。

「あゝあ、バレちゃったかあ。そう、私が通り魔なのよ。

ごめんね。腕、刺しちゃって……。彰人君だなんて気付かなかったのよ。」

……え？

「なっ、えっ？ 嘘……。だよね……。？」

「ん？ ほんとだよ。私ハ通・リ・魔・♪」

狂ってる。そんな笑顔で……。悪びれもなく……。

無性に泣きたくなった。俺を刺して、葉月を襲って、葉月の母さんを殺した人のことを心配して……。バカみたいじゃなか。心配す

る必要なんかなかった。

コノ子ガ通り魔ナンダカラ・・・。

「・・・自首して。由佳ちゃん。」

「イヤだよ。まだ、殺してない人がいるもん。」

今度は駄々をこねる子供のよう。

でも、もう恐怖とイラつきと・・・こいつを葉月のお母さんと同じように殺してやりたい、という感情しか沸いてこなかった。

「え・・・？」

嫌な予感が全身を駆け巡る。

まだ・・・殺してない人・・・？

「は・づ・き・ちゃん・を・♪」

それだけ言うと、由佳ちゃんは物凄い勢いでテーブルを俺の方に投げてきた。そう、まるでちゃぶ台返しみたいに。

でも、このテーブルは俺が起こすのも大変なくらいに重いものだ。それを・・・あんな軽がる・・・！

「由佳ちゃん！ 待て！！！！・・・クソッ！！ 葉月が・・・！！！！！！」

俺は、倒れたテーブルも俺を止めようとするウエイトレスの声を無視して、由佳ちゃんの後を・・・葉月の家へと向かった。携帯で急いで電話をかけながら・・・。

由佳視点 葉月ちゃん

私は、できる限りの速さで葉月ちゃんの家へと向かっていた。

彰人君に机倒しちゃったけど、大丈夫だったかな？

あとで会ったら、謝つとかないと・・・かな？♪

「葉月ちゃん・・・。この時間ならもう家に帰っているはず。急いで殺しておかないと♪」

心はピクニックでも行くようにウキウキとした気分♪

『自首して』・・・か。私は彰人君のために殺ってきたのに・・・。

彰人君は少し不満げ？

なんでだろ・・・？

ああだこうだ考えている内に、葉月ちゃんの家へと着いた。

微妙に葉月ちゃんの部屋らしい場所のカーテンが揺れたのが見えた。

・・・そこにいるのね。葉月ちゃん♪

一階の窓をそこらへんに転がっていた大き目の石で叩き割る。

防犯はちゃんとしておかないとダメだよ・・・葉月ちゃん・・・。

私みたいなのが、こんなに簡単に家に侵入できるだなんて・・・。

あとで彰人君にも言っておこう。

家ノ戸締リハ、シツカリネ・・・

ッテ♪

割った窓から手を入れ、鍵を開ける。

部屋を見る限り、リビング・・・かな？

きっと、今までここで楽しく家族でおしゃべりしたり、食事をしたのかな・・・？

ふふ・・・クソ食らえだわ。

「葉月ちゃん？・・・どこかな？」

どこにいるかは知っている。それでも、訊ねる。

恐怖ニ震エロ・・・

死ヲ感ジロ・・・

ソウ・・・

私ヲ喜バセテ・・・

葉月チャン・・・

「・・・2階・・・かな？」

かすかに2階から物音がした。

2階に来られる・・・と恐怖しているのだろう・・・。

可愛らしい葉月ちゃん。そうだよ。死に直面した事なんてないよね。いきなりのことと怖いよね。

大丈夫よ・・・。そんなに痛くないだろうし・・・。

すぐ、楽にしてあげるから・・・♪

2階へゆっくりゆっくり上っていく。

きっと、足音がするたびにビクビクしているのだろう・・・。

嗚呼・・・私モぞくぞくシチャウ・・・♪

上りきると、部屋が三つ。

1つは・・・トイレ？

もう1つは、お母さん達の部屋かな・・・？

・・・ふふ・・・葉月の部屋って・・・書いてある部屋はっけーん♪
ゆっくり扉を開けて、中の様子を伺う。

・・・ドコダ？

しばらくキョロキョロと探すと、ベットのふとんがゆっくり上下しているのが見えた。

チツ・・・寝てたのか・・・じゃあ、さっき物音がしたのもきつと寝返りかなんかをしたからね。
・・・クソつまんねー・・・。

まあ・・・いっか。

こっちのほうで殺しやすい・・・。

今も上下しているふとんに・・・毎日持ち歩いている包丁を取り出しながらゆっくりと近づく。

そして・・・すぐさま頭らしいところに包丁をつきたてた。

ふとんの上下の動きがなくなり、うす水色のふとんがじわじわと赤に染まっていく。

「葉月ちゃん・・・。どんな夢を見てたのかな？
・・・ねえ？」

痛クナカッタデシヨ・・・？」

彰人視点 間ニ合ツタ？

間に合ってくれ・・・！！！！

そう願いながら、葉月の家へと急いで向かう。

守るって言ったんだ・・・！！

葉月・・・！！！！

葉月の家へと着くと、家の周りをパトカーが囲っていた。
間に・・・合ったのか・・・？

「あつ、彰人くん・・・！」

ああああああああ・・・。

「葉月・・・！よかった。間に合ったのか。」

一台のパトカーのそばに葉月を見つけた。

どうやら・・・俺の『通報』は間に合ったらしい・・・。

葉月ちゃんにテーブルをひっくり返されてすぐ、俺は警察に通報をしていた。

本当は、すぐにでも葉月に電話をしたかったが、今は警察のほう为先だと思った。電話に出た人に、今の状況を説明し、すぐに葉月を保護してくれるようにお願いした。

さすが警察。対応が早くて助かった。

『君だね。通報してくれたのは・・・。』

ありがとう。君のおかげで、彼女を守ることが出来たよ。』

「いえ……。こちらこそ、葉月を保護していただき、ありがとうございました。」

本当に、この刑事さんたちには感謝しなきゃな……。

『それで、すぐで申し訳ないのだけれど、君達にも詳しい事情を聞きたいから、署まで一緒に来てもらえないかな？』

「……葉月は大丈夫か？」

「うん……。大丈夫！」

葉月は思ってた以上に元気だ。

いや、俺に心配をかけないように元気に振舞っているのかな？

「そうか……。はい、行きます。」

早くこんな事件にけりをつけて、葉月と一緒にあのケーキ屋にパフェを食べに行こう。

『ご協力感謝します！』

じゃあ、こっちのパトカーに乗って。』

パトカーに乗ると、ああ……終わったんだな、と妙に安心した。もう、安全……。これからはまたいつもの平凡な日常に戻るんだ……。

安心からかパトカーの中で少しウトウトとしながら警察署に着いた。先程の刑事さんに会議室のような場所に通された。そこには、ドラマとかに出てきそうな渋めの刑事が座ってまっていた。

『どうも。お忙しい中、捜査にご協力いただき感謝します。』

「いえ……。」

ぺこり……と軽くあいさつを交わして、席に着くように促された。

『さて、いきなりで悪いけど……。犯人との関係を教えてくれるかな？』

本当にいきなりだな……。と思いながらも質問に正直に答える。

「同じ高校の友達……でした。」

『本当に？彼女さんの前で言いにくい……。とかナシだよ？』

少しムツとする。

何なんだ、この刑事は！

「嘘なんかついていません。」

『ふーん……。では……。』

この後も、なんだかんだと少し勘に触るようなことを聞かれたりはしたが、事情聴取らしいものが終わりにかけていた。

『はい。もう結構です。』

貴重なお話ありがとうございます。』

「いえ……。」

やっと終わったよ。と安心してたのに・・・、刑事はこの後も話を続けた。

『じゃあ、君！彼らを家までお送りして。

あつ、彼女さんはしばらくホテルの方へお泊まり下さい。家のほうはもう少し詳しく調べたいので・・・。』

俺達を連れてきた刑事が、渋い刑事に『はっ』と言って敬礼をしている。

立場は渋い刑事の方が上みたいだ・・・。

「はい。分かりました。」

「あつ、俺ん家に泊まれば？母さんも葉月が来れば喜ぶと思うよ。」

「ありがとう。じゃあ・・・お言葉に甘えちゃおうかな♪」

そんな話をしながら刑事さんに連れられ署内を歩いていると、前方にぐったりとした刑事さんがイスに座りうなだれていた。

『おい、大丈夫か？』

見かねて、俺たちを連れてきた刑事さんが声をかける。

すると、ぐったりとした刑事さんが大丈夫じゃなさそうに『大丈夫です』と答えていた。

『ああ、お前『あの子』の取調べだっけ？』

あの子・・・？

『はい。自分は見ているだけなのですが……。彼女すごいですね。まだ高校生なのに、こう……。狂気が吹き出しているというか……。言っていることが支離滅裂で……。』

今、先輩が精神医に診せよう、と言っていました。おそらく精神異常と診断されるでしょうね……。』

……。なんとなくだけれど、あの子が由佳ちゃんのことを言っているんだろう。と予想できた。

……。精神異常。

由佳ちゃん。あんなに優しく笑っていた君に……。いったい何があったんだい？

由佳視点 私ノ彰人君

葉月ちゃんの部屋でふとんを刺すと、どうやらそれは警察が用意したらしいダミーの人形だった。

その場で『連続通り魔殺人と住居侵入及び殺人未遂の現行犯で逮捕する』で・・・今は、警察署の取調室へと押し込まれている。

『君と・・・彰人君だっけ？その人との関係を教えて。』

これで何回目の質問だろうか・・・。

「私と彰人君は恋人同士デス・・・。」

もう面倒くさいなあ・・・。

『でも、彰人君は『君とは友達だ』と言っていたよ。』

「照れてるんでしょ？」

どうして似たような質問を何度も何度も・・・。

『じゃあ、葉月ちゃんのことについて教えてくれるかな？』

「葉月ちゃんは、私と彰人君の仲を引き裂こうとし、彰人君に無言電話をかけたりしたストーカーです。

だから、彰人君を助けようと思いました。」

『助けようとして・・・彼女を殺そうとしたり、関係のない人たちを殺したのかな？』

「そうです。ああ・・・あなた達が邪魔するから目的を・・・葉月ちゃんを結局殺せなかった。

警察って本当に邪魔よね。捕まえなきゃならない犯人は捕まえられず、時効だ時効だとか言ってるくせに、正しいことをしようとしていた私を捕まえるなんて・・・。」

『・・・果たして、君のしたことは本当に正しいのかな？』

「正しいに決まってるじゃない。だって、私は愛し合っている彰人君を助けようとしていたのよ？

今だって、もしかしたら彰人君はあのストーカーに悩まされているかもしれない。かわいそうな彰人君・・・。」

『それは違う！』

今まで黙っていた若い新米刑事がいきなり声を張り上げた。

取調べしてる刑事の後ろに隠れるようにいた奴が、一体なんだ？

彼を制そうとしている取調べの刑事。それでも新米刑事は止まらなかった。

『だって、彼と君は愛し合ってなんかいない！むしろ彼は迷惑していたはずだ！』

彼は君に殺されそうになったんだぞ！幸い死にはしなかったが、腕にケガを負ってしまったんだ！

彼の彼女を襲ったり・・・彼女の母親を殺そうとするなんて・・・！君は・・・！』

その振り上げている拳は、私を殴ろうとしているのかな？

そこで、取調べの刑事が無理矢理彼を制していた。新人はこれだか

らダメよね。

「ふふ・・・ダメね。そんなに感情を荒げるなんて。

彰人君のことを語るならばもっとクールでなくちゃ。それに、容疑者を殴ったりなんかしたらあなた、もう刑事としてやっていけないわよ？」

私が、刑事に暴力を振るわれたといえ、あなたはクビ・・・もっと頭で考えて行動しなさい。」

『貴様・・・!!』

新米刑事が怒りに満ちた表情で私を見ている。

何かしら？その目は・・・。まるで「お前に言われたくない。」と言わんばかりだ。

まあ、実際言っていたし・・・。

「私は頭で考えて行動したわよ。

だから、あなた達は今まで私を捕まえるどころか、凶器すら分からなかったんじゃない。

でしょう・・・？おバカな刑事さん♪」

『・・・!!』

怒りの限界を超えたらしい彼はジタバタと暴れていたが、別の刑事に抑えられ外へと出されていた。

そのとき、うつすらと聴こえた。彼の・・・彰人君の声・・・。

それに付き纏うように聴こえる葉月ちゃんの声も・・・!!

「彰人君ハ私ノモノ！」

近ヅクナ・・・触ルナ・・・纏ワリツクナ・・・。」

私を見た刑事達は、少しぼそぼそと話してから2人とも出て行った。
でも、何を話しているなんて聴こえなかったし、興味もなかった。

「私ノ．．．私ノ．．．彰人君ヨ．．．！
彰人君ハ．．．私ダケノモノ．．．！」

彰人視点 安息ノ日々

俺は、今平凡な日々を送っている。

あの事件・・・由佳ちゃんが葉月を殺そうとした日から数日。もしかしたら、まだ2日も経っていないかもしれない。

もう、早く忘れるように努力をしている。

・・・しているのに、テレビではあの事件が延々とやっている。

『次のニュースです。』

恐ろしい片思い。行き過ぎだ高校生の愛憎渦巻く物語！

先日起きた、片思いの男子生徒へ歪んだ愛情を注いだ彼女は・・・
一体どんな心境だったのでしょうか・・・。』

「もういい加減にしてくれよ・・・。」

「あーきと君♪おはよ。」

後ろからピヨコリと出てくる葉月。

葉月は今、俺の家へ泊まっている。葉月の家はまだ捜査中のため、まだ家へ帰ることができない。

母さんは娘が出来たと喜んでるし、葉月のほうも・・・。

2代目お母さんと泣きながら喜んでいた・・・。殺された葉月のお母さんは帰っては来ないけれど、でもこれであの世で安心して眠れるよね？おばさん・・・。

『・・・ダ・・・メよ・・・。』

「え・・・？」

どこからか声がしてきた。おっ、おばさん？

『まだ・・・お・・・わって・・・ない・・・わ・・・き・・・を
つけ・・・て・・・』

「一体・・・どうゆ「このサスペンス微妙ですね！」

「そうね・・・。最後の台詞が陳腐すぎ！まだまだね。」

どうやら、葉月と母親が一緒に観賞していたサスペンスの台詞だったらしい。

なんだ・・・心配して損した。

大体、もう終わったんだもん・・・。由佳ちゃんは逮捕されたし・・・。

俺と葉月には、もう平和な日々が帰ってきたんだ・・・。

『・・・番組の途中ですが、緊急ニュースをお知らせします！
ただ今入った情報によりますと、『連続通り魔殺人事件』の犯人として逮捕された高校生』

「・・・！由佳ちゃんのことだ！」

いやな汗が体中を流れる。

葉月と母さんも似たような感じでニュースを見ている。

『取調べ中に自殺したことが分かりました。』

「・・・自殺！？」

「そんなぁ・・・！！！」

葉月と俺がガタツと席を立て、ニュースに文句を言う。
俺は急いで刑事さんへと電話をかけた。

『なにか思い出したことがあったら電話してくれ。』

そういわれて、携帯の番号を教えてもらっていたから。
まさか、こんなことで電話することになるとは思わなかった。

『はい・・・もし「一体どうゆうことですか！由佳ちゃんが・・・
自殺って！」

電話にでた瞬間に、一気にしゃべる俺とは反対に刑事さんは落ち着
いていた。

『落ち着いて！俺だって急なことで驚いてるんだから。』

「すみません・・・。あの、それで由佳ちゃんは・・・？」

『・・・死んだよ。取調べ室で舌を噛み千切ってね・・・。まさか、
そんな事するなんて誰も思わなくてね。
面目ない・・・。』

「そん・・・な・・・。」

『ああ！分かったすぐ行く！』

刑事さんが、電話の向こう側で誰かと話している。

『すまない。これから記者会見をしなきゃいけないんだ。』

詳しい話はまた今度な・・・。」

そこまで言うと、すでに電話は切られてしまっていた。
刑事さんも色々忙しいのだろう・・・。警察は責任問題を問われる
だろうな・・・。

「刑事さん・・・なんだって？」

そばで話を聞いていた葉月は、震える声でそう聞いてきた。

「取調室で舌を噛み切って・・・死んだらしい。」

「嘘・・・。」

葉月も俺と似たような反応。

顔面蒼白で、立っていることすらできなくなっていた。

由佳ちゃんが死んで・・・悲しみもちろんあるが、それよりある
のは・・・恐怖・・・。
怖くて怖くてしかたない・・・。
由佳ちゃん・・・。君は・・・。

特別視点 新米刑事

俺は、弱い人々を守り、悪い奴を捕まえる。

強きを挫き弱きを助ける……。そんなものを夢見て刑事になった。だが、俺は強きを挫くことができないかもしれない……。と今日、しみじみと思ってしまった。

今、署内は大変な騒ぎである。

『おい、そっちのほうに記者集めろ！』

「ジャンジャンファックスが入ってるぞ！」

『抗議の電話も半端ないぞ！』

「落ち着け！俺だって驚いてるんだから！」

彼女……『連続通り魔殺人事件』の犯人、由佳ちゃん……。

本当にもう……彼女にはバカにされっぱなしな気がする。

取調べ中は『頭を使え』とバカにされ・・・その後も何度も何度もバカにされた。それも楽しそうに。

俺は彼女にとって、おもちゃのような扱いを受けた気がする。

それに、今回のコレ・・・。

取調べ中に自殺……。そのとき、俺はその場にいた。

[illegible]

『ねえ、新米刑事さん。』

つまんないよ。彰人君連れてきてよ。

「君は・・・、なんでそんなに彰人君が好きなの？」

『ん？』

だって、彰人君は優しくて・・・笑顔がステキで・・・涙もろくて・・・そのくせ、大切な人のためには命投げ出すぐらい頑張ってる。

フフ・・・彼に勝る男は、この世にはいないでしょうね。』

壮絶なノロケだな・・・。

ストーリーしてたくせに・・・。

「おノロケごちそうさま・・・。」

『はぁ〜い♪』

ホントに・・・この子は捕まったはずなのに、なんでこんなに楽しそうなんだか・・・。

全く・・・でも、こうしてみると・・・ただの女の子だよな・・・。恋して、それを誰かに話して（まあ、ノロケ）、照れながら嬉しうにしたり・・・。

ストーリーとか殺人さえしなければ、普通の恋する女の子だったのに・・・。

「まあ、ノロケぐらいならいつでも聞いてあげよう・・・。」

『あら、ありがとう♪』

でも・・・もうムリみたいよ。』

「え・・・？」

なんでだ？

もしかして、彼女は自分が精神病棟に入れられることを知っているのかな？

「でも、面会はできるはず。」

『ムリでしょう？』

行ったら行ったきり……。帰って来ることなんかできないわ。

私は……。それを望んだのだけれどね……。彰人君のためだし……。』

「……。？ 一体なんのことだい？」

病院のことじゃない……。？

行ったら行ったきり……。？

彰人君のため……。？

一体彼女は何のことを言っているんだ？

『フフ……。バイバイ、新米刑事さん♪』

あなたも彰人君ほどじゃないけど、優しい……。いい人だったわ。
ありがとう……。』

彼女はドサツと床に倒れた。

「ちょっと、君！君！！由佳ちゃん！！！！！！」

抱き起こしてユサユサと肩を揺さぶるけれど、彼女は返事をしなかった。

口からダラダラと血が出て、口の中から真っ赤な肉片が落ちてきた。
舌を噛み切ったのか……。！！！！

「誰か・・・!!救急車・・・救急車お願いします!!!!」

急いで医者を呼んだけれど・・・彼女は助からなかった。
彼女の死に顔は・・・優しく笑っていた。

「なんで・・・。なんで・・・!!!!」

由佳ちゃん・・・。

——————————————————————

『おい!新米!!』

この書類を署長に届けに行くついでに、今回のことについて話に行
くぞ!!』

「あっ・・・はい!」

俺は、強きを挫くことはできないだろう。

だから・・・弱きを助ける・・・彼女のような犯罪者を出さないよ
うな・・・そんな刑事になろう!

「わっ!・・・イタッ!!!!」

ドタッ・・・!

こっ、転んだ・・・。

『おいおい・・・。』

・・・程ほどに頑張ろう。

まずは、足元の注意から・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1030p/>

私ハ貴方ヲ愛シテル

2012年1月13日18時58分発行